

前原地区遺跡群

III

福岡県前原市大字前原通称上町所在の遺跡

前原市文化財調査報告書

第 45 集

1993

前原市教育委員会

正 誤 表

頁	行	誤	正
図版目次 図版16b		● (東から)	● (西から)
5	16行目	● 推積し	● 堆積し
26	18行目	● 第1号土壙測から	● 第1号土壙墓から
32	7行目	● 29墓もの	● 29基もの
33	5行目	● 応年五年	● 応永五年
図版16b		● (東から)	● (西から)

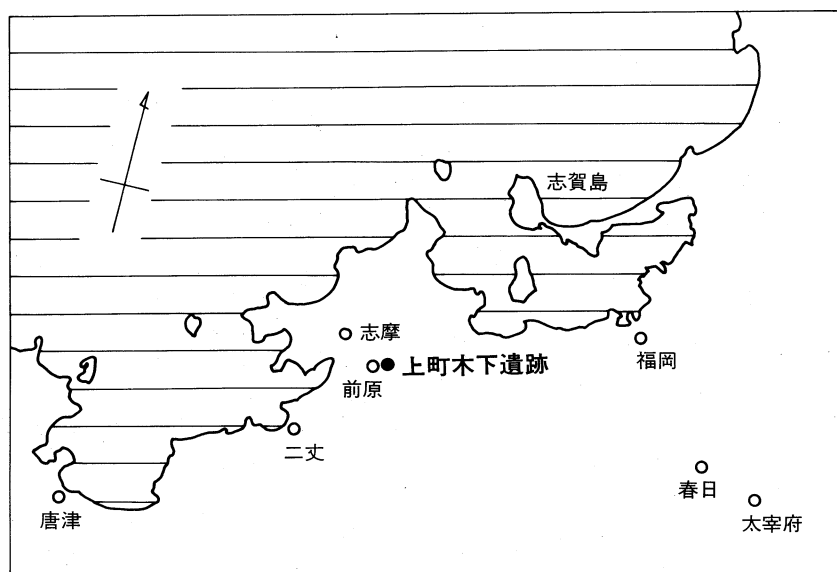
前原地区遺跡群

III

福岡県前原市大字前原通称上町所在の遺跡

前原市文化財調査報告書

第 45 集



1993

前原市教育委員会

序

前原市（平成4年10月1日より市制施行）は福岡市のベットタウンとして着実な進歩を遂げています。平成5年には今宿バイパスが開通し、今後さらなる土地開発が行われると予想されます。

前原地区はJR筑前前原駅を擁し、国道210号線に隣接することから前原市の交通の要衝であるのと同時に、多くの文化財がねむっている地域でもあります。今回の報告は前原地区（上町木下地区）における民間のマンション建設に伴う発掘調査の結果をまとめたものです。この調査は株式会社穴吹工務店の文化財に対する深い理解と協力を得、同社の受託事業として行われました。その結果、中世の火葬土壌をはじめ、多数の遺構を検出しております。

この報告書が、今後の研究資料の一つとして、また、大切な文化財の保護・保存の一助となれば幸いです。



なお、発掘調査にあたり御協力いただいた地権者、猛暑の中の作業に御協力くださった地元の方がたに対し深甚の敬意を表します。

平成5年3月31日

前原市教育委員会

教育長 檜 木 昭 生

例 言

1. 本書は高層住宅建設に伴う前原市教育委員会が行なった埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 本遺跡は、福岡県前原市大字前原他に所在するもので、その小字名をとって上町木下遺跡とする。
3. 遺構実測は、林 覚、瓜生秀文が行い、製図は岡部裕俊・野田純子の協力を得て瓜生が行なった。また、遺構写真は林、瓜生が撮影した。
4. 遺物実測は、瓜生、川上、末松があたり、製図は主に瓜生が行なった。遺物写真は瓜生が撮影した。
5. 本書の作成にあたり、同僚の岡部・野田の協力を得た。また、山本信夫・狭川真一・山村信榮（太宰府市教育委員会）各氏から数々の御助言・御助力をたまわった。記して感謝の意を表したい。
6. 本書における第4図から第16図の土層図の  は焼土層、 は炭灰層を意味する。
7. 本書の執筆、編集は岡部・野田の協力を得て瓜生が行なった。

本文目次

	頁
I はじめに	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の組織	1
II 調査の記録	3
1. 位置と環境	3
2. 調査地点概要	5
3. 遺構・遺物各説	5
III おわりに	32

図版目次

図版1	上町木下遺跡調査地点全景（東から）
図版2	a. 第1号火葬土壇（北から） b. 第1号火葬土壇土層（東から）
図版3	a. 第2号火葬土壇（北から） b. 第3号火葬土壇（北から）
図版4	a. 第4号火葬土壇（北から） b. 第5号火葬土壇（北から）
図版5	a. 第6、7号火葬土壇（北から） b. 第8号火葬土壇（北から）
図版6	a. 第9号火葬土壇（北から） b. 第10号火葬土壇（北から）
図版7	a. 第11号火葬土壇（北から） b. 第12号火葬土壇（北から）
図版8	a. 第13号火葬土壇（北から） b. 第14、15号火葬土壇（北から）
図版9	a. 第16号火葬土壇（北から） b. 第16号火葬土壇土層（南から）
図版10	a. 第17号火葬土壇（北から） b. 第18号火葬土壇（北から）

- 図版11 a. 第18号火葬土壌土層（東から）
b. 第18号火葬土壌土層（北から）
- 図版12 a. 第19号火葬土壌（北から）
b. 第20号火葬土壌（北から）
- 図版13 a. 第21号火葬土壌（南から）
b. 第22号火葬土壌（北から）
- 図版14 a. 第22号火葬土壌土層（西から）
b. 第23号火葬土壌（北から）
- 図版15 a. 第24号火葬土壌（南から）
b. 第25号火葬土壌（北から）
- 図版16 a. 第26号火葬土壌（北から）
b. 第26号火葬土壌（東から）
- 図版17 a. 第27号火葬土壌（北から）
b. 第28号火葬土壌（南から）
- 図版18 a. 第29号火葬土壌（西から）
b. 第1号土壌墓（西から）
- 図版19 上町木下遺跡出土遺物

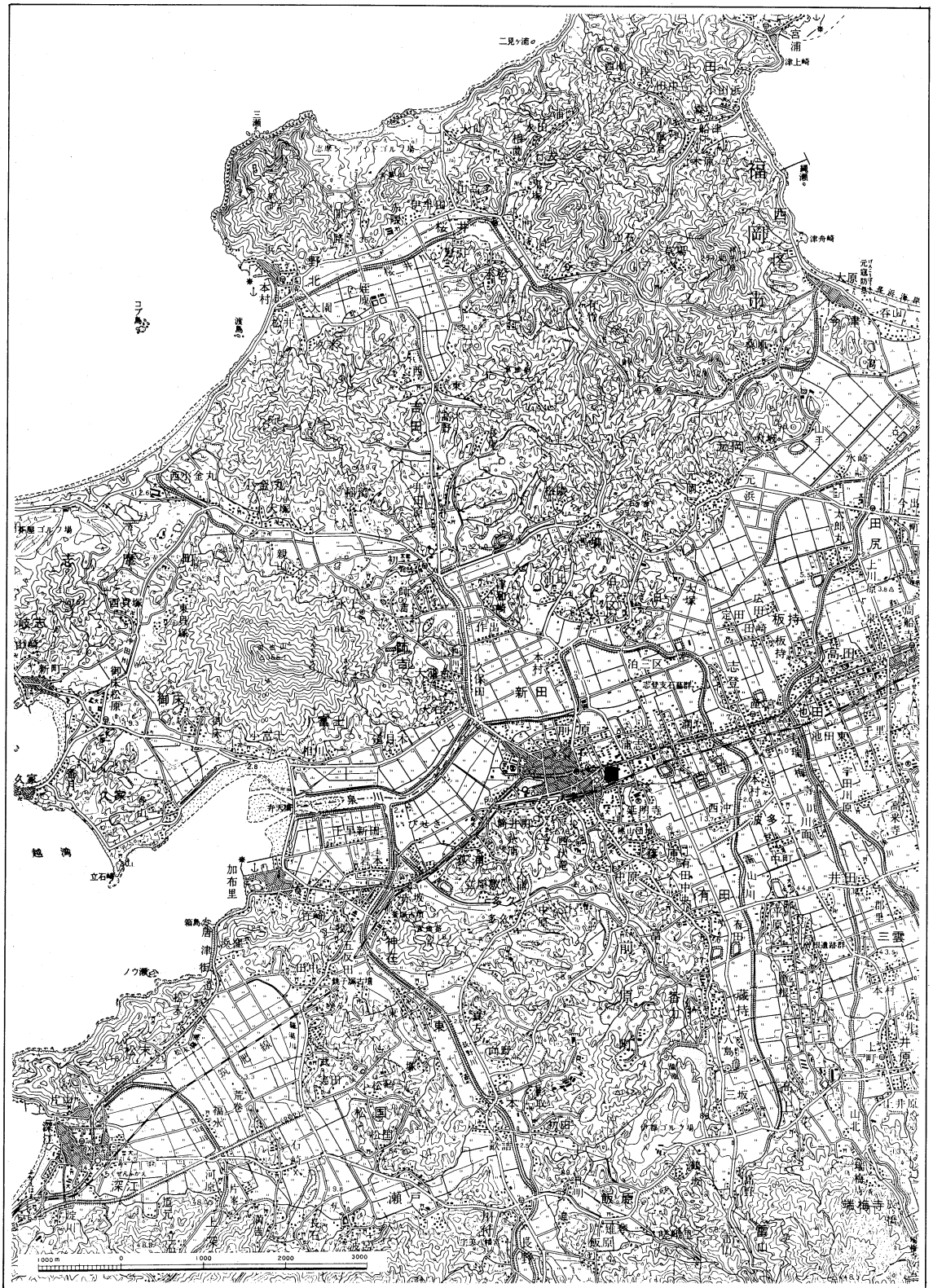
挿 図 目 次

	頁
第1図 上町木下遺跡の位置（1/75,000）	2
第2図 上町木下遺跡周辺の遺跡（1/5,000）	4
第3図 上町木下遺跡調査区内遺構配置図（1/150）	6
第4図 第1、2号火葬土壌実測図（1/20）	8
第5図 第3、4、5号火葬土壌実測図（1/20）	10
第6図 第6、7号火葬土壌実測図（1/20）	11
第7図 第8、9号火葬土壌実測図（1/20）	13
第8図 第10、11号火葬土壌実測図（1/20）	15
第9図 第12、13号火葬土壌実測図（1/20）	17
第10図 第14、15号火葬土壌実測図（1/20）	18
第11図 第16、17号火葬土壌実測図（1/20）	

第12図	第18、19号火葬土壙実測図（1／20）	19
第13図	第20、21、22号火葬土壙実測図（1／20）	21
第14図	第23、24号火葬土壙実測図（1／20）	23
第15図	第25、26、27号火葬土壙実測図（1／20）	25
第16図	第28、29号火葬土壙、1号土壙墓実測図（1／20）	27
第17図	上町木下遺跡出土遺物実測図（1／3）	28
第18図	上町木下遺跡出土遺物実測図（1／4 石器、土弾のみ1／2）	31

表 目 次

第1表	火葬土壙一覧表	頁 34
-----	---------	---------



第1図 上町木下遺跡の位置 (1 / 75,000)

I. はじめに

1. 調査にいたる経過

上町木下遺跡は福岡県前原市大字前原50、51-1、52-2に所在する。

当遺跡群の発掘調査への経過は下記の通りである。

平成2年5月、宅地造成の届出が株式会社穴吹工務店より提出された。これを受けて前原町教育委員会は、この地が周知の埋蔵文化財包蔵地であることを同社に連絡した。そこで、協議を行い、試掘調査を実施した。その結果、遺構の存在が確認されたため、同社からの受託事業として、前原市教育委員会が平成4年7月4日より同年9月22日まで発掘調査を実施した。

2. 調査の組織

平成4年度、上町木下遺跡の発掘調査事業にかかる調査の組織は下記のとおりである。

事業主体

(株) 穴吹工務店

調査主体

前原市教育委員会

総 括

教 育 長 檜 木 昭 生

教 育 部 長 菊 竹 利 嗣

(平成4年4月～11月文化課長兼務)

文 化 課 長 清 水 義 弘

(平成4年12月～)

文 化 財 係 長 川 村 博

庶 務

文 化 振 興 係 長 吉 村 耕 二

調 査

文 化 財 係 主 事 林 覚 瓜 生 秀 文

発掘作業 青木輝代 中村照子 藤森啓子 柏田睦子 岡田りつ子 中峰幸枝 原野スミ

平山富士子 三島美也子 小金丸利枝 本田タツ子 柳原きみ子 菊地ナオ子

野村松江 山崎チヨ子 徳永美根子 藤木綾子 米山八重子 高橋マツ子

藤森峯子 牧井定代 和多治子 島崎弘子 横山豊子 久間美佐子

整理作業 山口敏子 川上辰子 高橋久枝 末松伸子 島影やよい 豊榎美智子 砥上由佳



第2図 上町木下遺跡周辺の遺跡 (1 / 5,000)

II. 調査の記録

1. 位置と環境

前原地区は糸島平野の中央部に位置する。上町木下遺跡は雷山川と長野川に挟まれた標高約8～10mほどの舌状丘陵上にあり、その北には糸島平野が広がる。この糸島平野であるが、標高は3～5m程しかない。そのため、今日の今津湾と加布里湾を結ぶ標高の低い平野部はかつて「糸島水道」が通っていたとされていた。しかし、『朝野群載』の糸島水道に関する記述から従来とは異なった解釈が可能となるので一言触れておきたい。

寛仁3年(1019年)3月、中国東北部及び沿海州一帯を本拠とする女真族が兵船50余隻をもって朝鮮半島の東岸を荒しつつ南下し、対馬・壱岐・松浦・怡土・志摩の各地を侵し、さらに博多の警固所まで襲撃した。これに対し藤原隆家は刀伊国賊徒追撃軍を陸路・海路と分けて編成し、志摩郡船越津において撃破する。その海路軍の記述に「先是分遣精兵、豫令相待」とある。この史料から海路軍は陸路軍より先に出発し船越津で合流したことがわかる。すなわち海路軍が陸路軍より先に出発したのは、糸島半島沿岸部にそって進むルートを通る必要性があり、陸路軍よりも時間がかかることを予測していたためだと思われる。もし糸島水道が当時存在していたならば海路軍はわざわざ糸島半島をまわる遠距離コースを通る必要性はなく、陸路軍と一緒に轡を並べて追撃できたのではなかろうか。若干時代は下るが、奈良時代において遣新羅使・遣唐使一行も糸島半島をまわって松浦へ航行したようだ。そして糸島水道想定域中心部に志登神社が所在し、『延喜式』には式内社としてその記述がみられる。志登神社周辺には支石墓群・平安時代の溝など検出された志登遺跡群の分布がみとめられることから、当地は、弥生から平安時代にかけて陸地であったことがわかる。以上をふまえると、弥生から平安時代にかけて西は今日の泊地区、東は板持地区周辺まで海が大きく入り込んでいたと想定し得るが糸島水道の存在に関してはなお、検討の余地がある。

ところで、周辺における遺跡に目を移すと、調査地点の北東500mには小銅鐸と舌を出土した浦志遺跡(A地点)、東には甕棺墓を出土した糸島高校遺跡がある。さらに北西に目を移すと、弥生～古墳時代の墳墓遺跡として知られる上町向原遺跡、弥生～平安時代の遺構が検出された上町相原遺跡がある。また南には、前原南小学校の建設に先立って調査が行なわれた篠原新建遺跡があり、弥生時代中期の墳墓群が発見された。当地一帯で弥生時代以後、人々の活発な生活が営まれていたことが想起される。



第3図 上町木下遺跡調査区内遺構配置図 (1 / 150)

2. 調査地点概要

今回の調査地点は前述した様に、雷山川と長野川に挟まれた標高約8～10mほどの舌状丘陵上にある。当初は申請地全域を調査区として設定していたが、東西に2本ずつトレンチを入れたところ、西側においては弥生から平安期にかけての土器が出土したものの、東側においては表土のすぐ下から地山があらわれた。そこで調査費・期間等を考慮して、弥生から平安期にかけての遺構の存在が想定し得る申請地西部に調査区を限定することになった。調査区は縦28m・横18mをはかる長方形で、面積は504㎡ほどである。調査区設定後、最北側に東西方向に1本トレンチを入れたところ、上層に田畑耕作土、中層に中世の包含層、下層に弥生から平安期にかけての包含層が検出された。表土から中世遺構面までの深さは浅い所で20cm、深い所でも50cm程であり、遺構としては火葬土壌等を検出した。さらにその下には弥生から平安期にかけての包含層が存在したが、残念ながら遺構は確認できなかった。

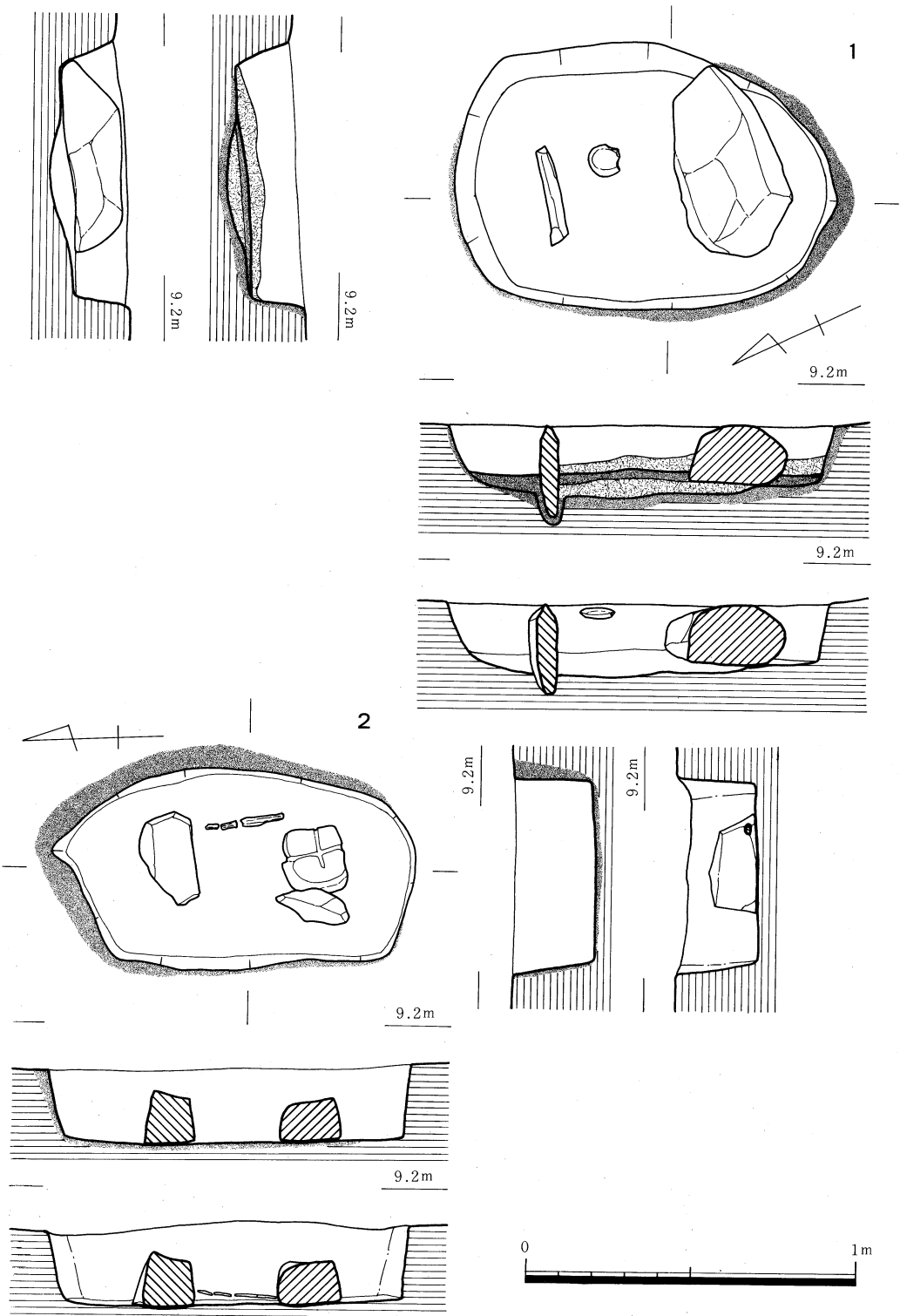
3. 遺構・遺物各説

(1) 火葬土壌

標高約10mの小高い丘陵の馬蹄形斜面に計29基を検出した。長さ100cm前後、幅60cm前後の楕円形もしくは隅丸長方形を呈し、現存深さ2～43cmを測る。壙内に1～7個の石を置き、それを棺台石としている。なかには棺台石のないものもある。棺台石、もしくは棺台石のかわりになるものを用いて遺体を茶毘に付した遺構を火葬土壌と称する。検出された29基のうち、供献品が埋納されていることから火葬墓と想定し得る遺構もあるが、遺体を茶毘に付した後に墓としたか否かは不明である。そこで、壙内に炭灰物、焼土、火葬骨等が推積し、壁及び底部に焼土層がみられるものをここでは火葬土壌としている。

第1号火葬土壌（第4図、図版2）

調査区の最南端に位置する。主軸方向をN-25°-Eに置く。長さ117cm、幅80cmの楕円形を呈し、現存深さ15cmを測る。南端に煙道とみられる若干の張り出し部分がある。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。壙内には南に長さ60cm、幅30cm、厚さ18cmを測る石1個、北に、長さ30cm、幅30cm、厚さ6cmを測る石1個を置き棺台石としている。棺台石は両方とも火を受け、表面が焼けて赤変している。南側の棺台石の下に焼土層が2層、その間に炭灰層が土層観察でみられ、北側の棺台石の掘り型も確認できる。壁も直接火を受けたようで、特に煙道側を中心に、厚さ4～5cmにわたり焼土化していた。火葬骨は南側棺台石の付近から多量に出



第4图 第1、2号火葬土壤实测图 (1/20)

土したもの、小片ばかりであった。層位としては、下から数えると2回目の焼土層上にあたり、この火葬骨は2回目の火葬の際のものと考えられる。さらに、墳内には土師皿1点が埋納されていることから、その土師皿を供献することによって火葬墓としたと想定し得る。

出土遺物（第17図、図版19）

第1号火葬土壙からは土師皿1点が出土した。口径12.4cm、高さ3.2cm、底径8.2cmを測る。体部から内底部までヨコナデ調整される。外底部は糸切りされ、板目はみられない。火は受けていないことから遺体を茶毘に付した後、供献されたと思われる。

第2号火葬土壙（第4図、図版3）

第1号火葬土壙の北西約1mに位置する。主軸方向をほぼN-Sに置く。長さ105cm、幅58cmの楕円形を呈し、現存深さ23cmを測る。北端に煙道とみられる張り出し部分がある。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。墳内には、北に長さ30cm、幅16cm、厚さ16cmを測る石1個、南に長さ20cm、幅20cm、厚さ13cmを測る石2個を置き棺台石としている。南側の棺台石の1個は花崗岩で表面に十字の溝が刻まれている。礎石を棺台石として転用したものと思われる。土層観察では、壁及び底部において厚さ約1~2cmの焼土層がみられ、特に北側の壁面は煙道があったためか厚さ5cmの焼土層が確認された。ただし、棺台石の下に炭灰層は確認できなかった。火葬骨はほぼ中央部で出土したが、微量で小片ばかりであった。また、墳内に刀子が1点埋納されていた。この刀子が火を受けていないことから、遺体を茶毘に付した後、その刀子を供献し火葬墓としたと想定し得る。

出土遺物（第17図）

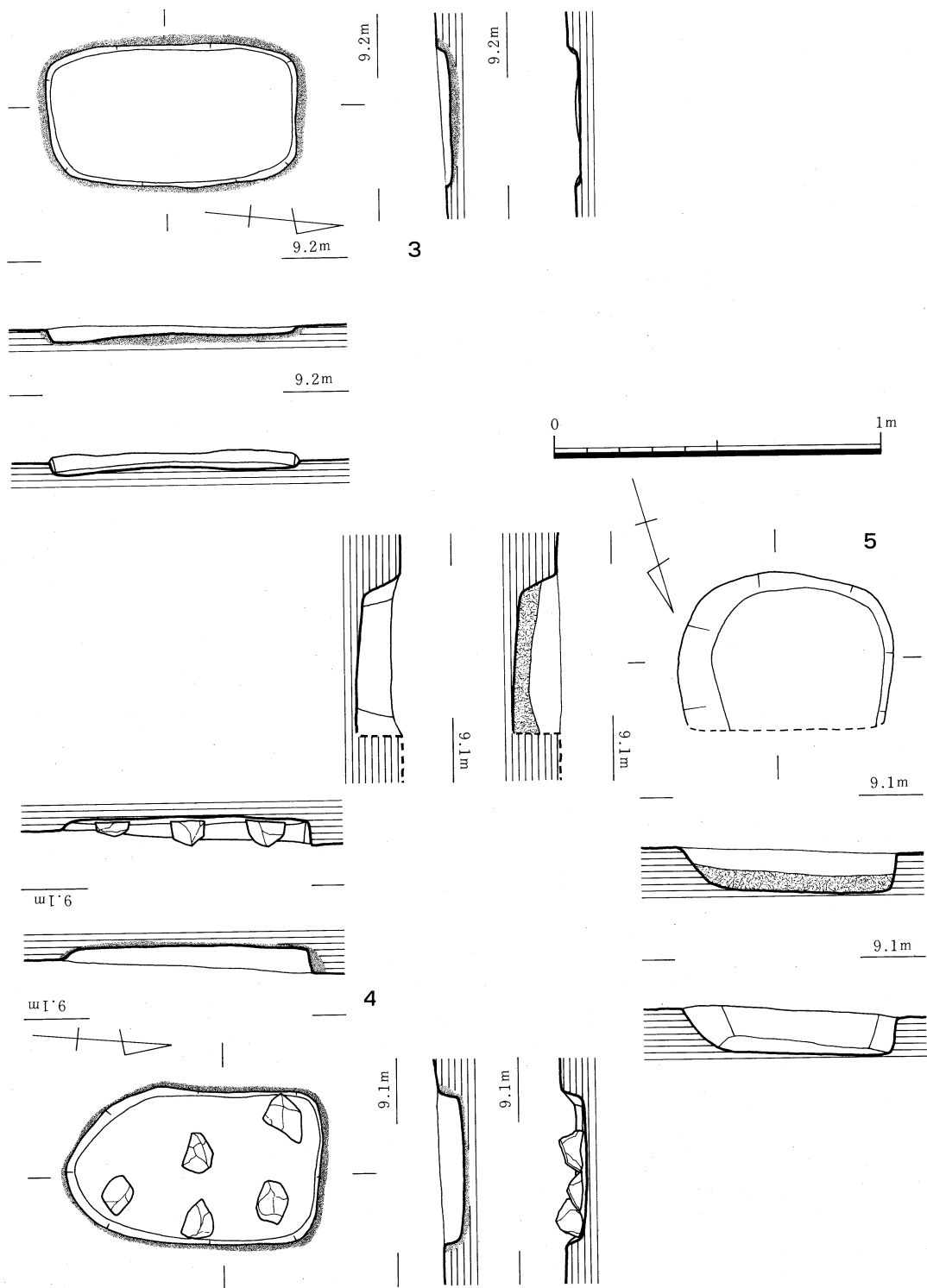
第2号火葬土壙からは刀子1点が出土した。全形を残すものではないが、遺存長26.4cm、身幅1.5cmを測る。柄の部分には銅板が巻かれている。

第3号火葬土壙（第5図、図版3）

第1号火葬土壙の北東約1mに位置する。主軸方向はN-5°-Wに置く。長さ75cm、幅43cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ約4cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。墳内には棺台石がみられない。土層観察では、壁や底に厚さ5cm前後の焼土層が確認できるが、底部の下には炭灰層は確認できなかった。火葬骨は墳内の南端から出土したが、微量で小片ばかりであった。土師器等の遺物は出土しなかった。

第4号火葬土壙（第5図、図版4）

第3号火葬土壙の北東1.7mに位置する。主軸方向はN-6°-Eに置く。長さ75cm、幅50cmの楕円形を呈し、現存深さ5cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。墳内に



第5图 第3、4、5号火葬土坑实测图 (1/20)

は、長さ12cm、幅9cm、厚さ9cmを測る石5個が置かれ棺台石としている。この火葬土壌は直接火を受けたようで棺台石の下に壁から底部にかけて厚さ2～3cmの焼土層が土層観察でみられる。しかし、底部の下に炭灰層は確認できなかった。火葬骨及び土師器等の遺物は出土しなかった。

第5号火葬土壌（第5図、図版4）

第4号火葬土壌の北西約1.2mに位置する。主軸方向はN-15°-Wに置く。現存長さ48cm、幅65cmの楕円形を呈し、現存深さ15cmを測る。後世の削平を受け残存状態はよくない。埋土は炭灰物を含む黒灰色粘質土である。墳内から棺台石は出土しなかった。土層観察で、墳内に厚さ約5～10cmの炭灰層が堆積しているのがわかる。壁及び底部には焼土層がなく、さらに、底部の下に炭灰層は確認できなかった。火葬骨は埋土の中から出土はしたものの、微量で小片ばかりであった。土師器等の遺物は出土しなかった。

第6号火葬土壌（第6図、図版5）

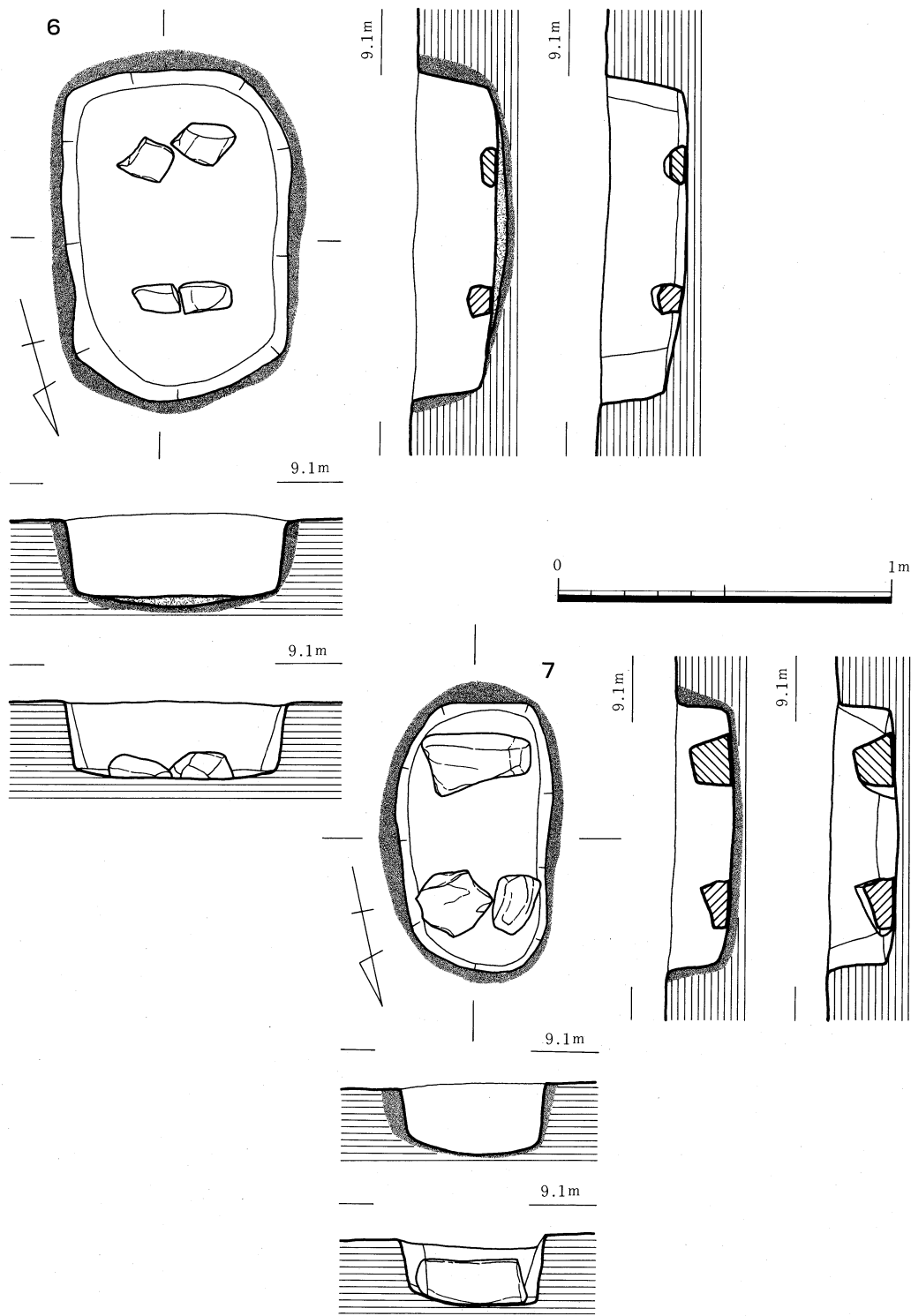
第5号火葬土壌の東に隣接して位置する。主軸方向はN-16°-Wに置く。長さ100cm、幅68cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ約25cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。墳内には、南に長さ20cm、幅13cm、厚さ5cmを測る石2個、北に長さ15cm、幅9cm、厚さ8cmを測る石2個を置き棺台石としている。土層観察では壁及び底部にかけて厚さ約4～6cmの焼土層がみられ、特に壁部が火を受けていることがわかる。また、棺台石の下には焼土層が2層、その間に炭灰層が確認できる。火葬骨は北側の棺台石周辺に出土したが微量で小片ばかりであった。土師器等の遺物は出土しなかった。

第7号火葬土壌（第6図、図版5）

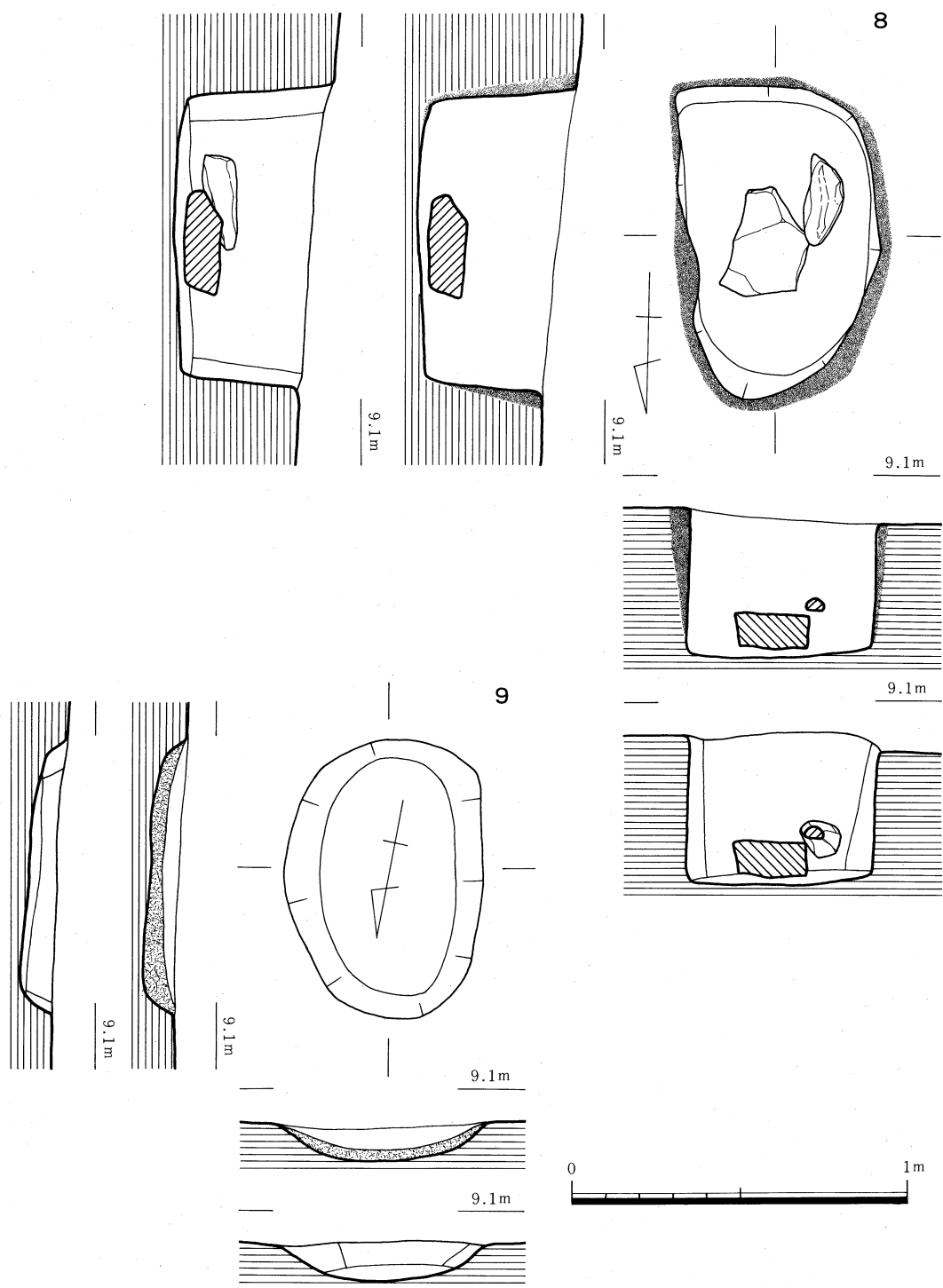
第6号火葬土壌の東側に隣接している。主軸方向はN-13°-Wに置く。長さ80cm、幅47cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ約20cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。墳内には南に長さ約30cm、幅20cm、厚さ13cmを測る石1個、北に長さ約20cm、幅20cm、厚さ10cmを測る石2個を置き棺台石としている。土層観察では壁及び底部にかけて厚さ約3～5cmの焼土層がみられ、特に壁部が火を受けていることがわかる。ただし、棺台石の下に炭灰層は確認できなかった。火葬骨は出土したが微量で小片ばかりであった。土師器等の遺物は出土しなかった。

第8号火葬土壌（第7図、図版5）

第3号火葬土壌の北約3.3mに位置する。主軸方向をほぼN-Sに置く。長さ92cm、幅59cm



第6图 第6、7号火葬土坑实测图 (1/20)



第7图 第8、9号火葬土坑实测图 (1/20)

の隅丸長方形を呈し、現存深さ43cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。壙内には中央部に長さ約30cm、幅22cm、厚さ11cmを測る石を2個置き棺台石としている。棺台石は共に底から2～10cmほど浮いた状態で検出され、さらに棺台石の下からも火葬骨が出土している。このことは、拾骨の際棺台石を動かしたため、土壙内が乱れたことを意味すると思われる。土層観察では、壁部に厚さ約3～7cmの焼土層がみられるものの、底部に焼土層は確認できなかった。また、底部の下に炭灰層は確認できなかった。火葬骨は棺台石周辺から出土したが微量で小片ばかりであった。土師器等の遺物は出土しなかった。

第9号火葬土壙（第7図、図版6）

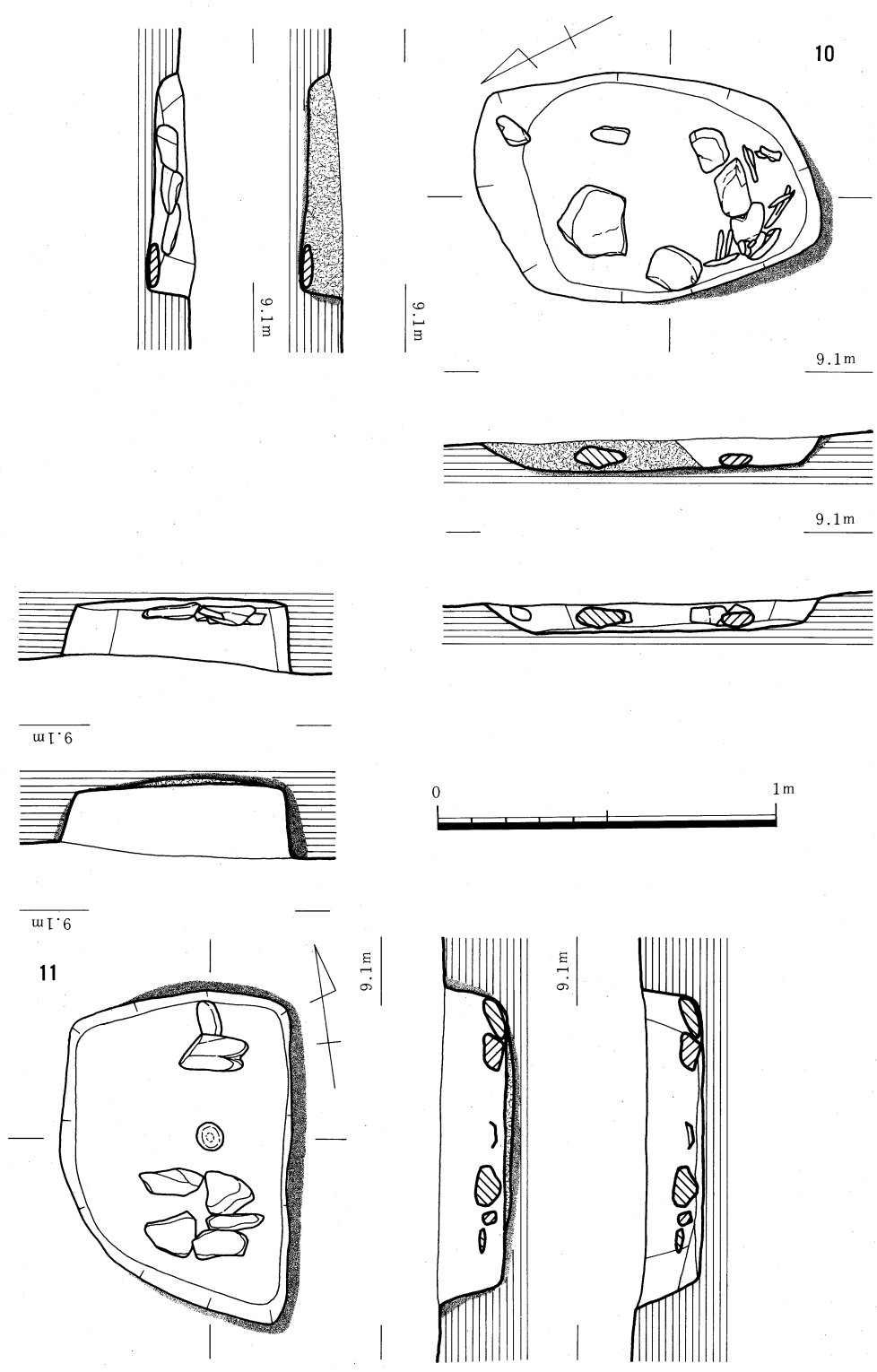
第8号火葬土壙の西約4.5mに位置する。主軸方向はN-10°-Eに置く。長さ83cm、幅60cmの楕円形を呈し、現存深さ約10cmほど測る。埋土は炭灰物を含む黒灰色粘質土である。壙内に棺台石はなかった。土層観察では、底部に約3～7cmの炭灰物が堆積しているのがわかる。しかし直接火を受けなかったためか壁及び底部に焼土層はみられなかった。また、底部の下に炭灰層は確認できなかった。火葬骨及び土師器等の遺物は出土しなかった。

第10号火葬土壙（第8図、図版6）

第7号火葬土壙の北東約3mに位置する。主軸方向をN-22°-Wに置く。長さ100cm、幅65cmの楕円形を呈し、現存深さ10cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。壙内から長さ約10～20cm、幅5～20cm、厚さ4～7cmを測る石を計7個検出し得た。その中でも、北側に置かれている石1個と、南側中央部に置かれている石2個は特に火を受けてその表面が赤変していた。検出された7個の石のなかでこの3個が主な棺台石として使用されたと思われる。土層観察では、壁及び底部に厚さ約1～3cmの焼土層がみられ、特に南側の壁部が火を受けたことがわかる。ただし、棺台石の下に炭灰層は確認できなかった。火葬骨は南側棺台石周辺から多量に出土したが小片ばかりであった。土師器等の遺物は出土しなかった。

第11号火葬土壙（第8図、図版7）

第10号火葬土壙の西約1.5mに位置する。主軸方向はN-8°-Wに置く。長さ94cm、幅68cmの楕円形を呈し、現存深さ22cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。壙内から長さ約15～20cm、幅約5～10cm、厚さ3～8cmを測る石を計7個検出した。それぞれ上面の標高がほぼ同じことから、7個の石を棺台石としたと思われる。なかでも最南部の1個は特に火を受けて表面が赤変している。土層観察では、棺台石の下に焼土層が2層、その間に炭化層が確認された。火葬骨は、南北棺台石付近から出土したが微量で小片ばかりであった。また、土師皿1点が埋納されていた。この土師皿を供献することによって火葬墓としたと想定し得る。



第 8 图 第10、11号火葬土坑实测图 (1 / 20)

出土遺物（第17図、図版19）

第11号火葬土壌からは土師皿1点が出土した。口径7.8cm、器高1.7cm、底径6.4cmを測る。体部はヨコナデ、内底部はナデである。外底部は糸切りされるが板目はみられない。火を受けていないことから遺体を茶毘に付した後、供献されたと思われる。

第12号火葬土壌（第9図、図版7）

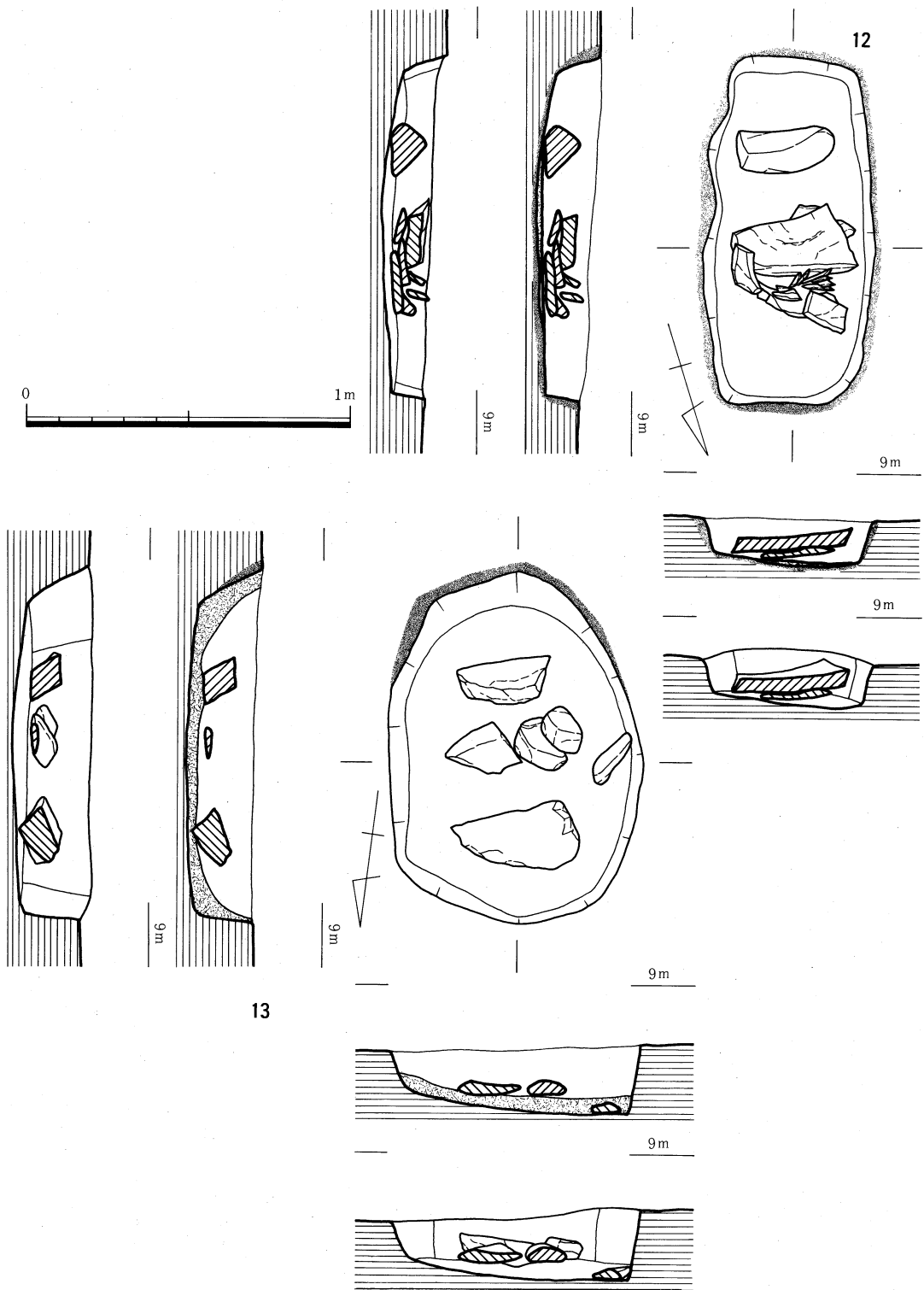
第11号火葬土壌の北西約2mに位置する。主軸方向はN-18°-Wに置く。長さ118cm、幅53cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ15cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。境内には、南に長さ30cm、幅13cm、厚さ11cmを測る石1個、北に長さ37cm、幅18cm、厚さ5cmを測る石1個と小礫が置かれ棺台石としている。特に南北の大きい棺台石の表面は火を受けて赤変している。土層観察では棺台石の下に焼土層が2層、その間に炭化層が確認できる。火葬骨は出土したものの、微量で小片ばかりであった。土師器等の遺物は出土しなかった。

第13号火葬土壌（第9図、図版8）

第12号火葬土壌の北東約1.2mに位置する。主軸方向はN-17°-Eに置く。長さ109cm、幅78cmの楕円形を呈し、現存深さ約20cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。境内から、大きいもので長さ約40cm、幅20cm、厚さ13cmを測り、小さなものでも長さ約15cm、幅10cm、厚さ7cmを測る石が計6個検出され、それらを棺台石としている。なかでも中央部にある3つの石は火を受けて表面が赤変している。土層観察では棺台石下に厚さ約3～7cmの炭灰層が確認できるものの、棺台石が地山から浮いた状態で検出されていることを考えると、拾骨の際、境内が乱れ棺台石の下に炭が入り込んだと思われる。南側の壁に厚さ約2cmの焼土層が確認されるが、底部の下に炭灰層は確認できなかった。火葬骨は棺台石付近から出土したが微量で小片ばかりであった。土師器等の遺物は出土しなかった。

第14号火葬土壌（第10図、図版8）

第13号火葬土壌の東約15mに位置する。主軸方向はほぼN-Sに置く。長さ117cm、幅53cmの楕円形を呈し、現存深さ15cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。境内には、大きいもので長さ約30cm、幅25cm、厚さ11cm、小さいものは長さ20cm、幅15cm、厚さ7cmの石が計6個置かれ、それを棺台石としている。土層観察では棺台石の下に焼土層が2層、その間に炭灰層がみられ、また壁及び底部には厚さ約3～5cmの焼土層が確認できる。火葬骨は中央部の棺台石付近で出土したが微量で小片ばかりであった。土師器等の遺物は出土しなかった。



第9图 第12、13号火葬土坑实测图 (1 / 20)

第15号火葬土壌（第10図、図版8）

第14号火葬土壌の西に隣接し、それをきっている。主軸方向はN-20°-Wに置く。長さ91cm、幅50cmの楕円形を呈し、現存深さ15cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。墳内には、南に長さ25cm、幅15cm、厚さ5cmを測る石1個、北に長さ30cm、幅18cm、厚さ6cmを測る石1個があり棺台石としている。棺台石は両方火を受け、表面が赤変していた。土層観察では壁及び底部に厚さ3～7cmの焼土層がみられ、特に西側壁部が火を受けたことがわかる。また、棺台石下に焼土層が2層、その間に炭灰層が確認できる。火葬骨は中央部と南北棺台石付近から出土したが微量で小片ばかりであった。土師器等の遺物はなかった。

第16号火葬土壌（第11図、図版9）

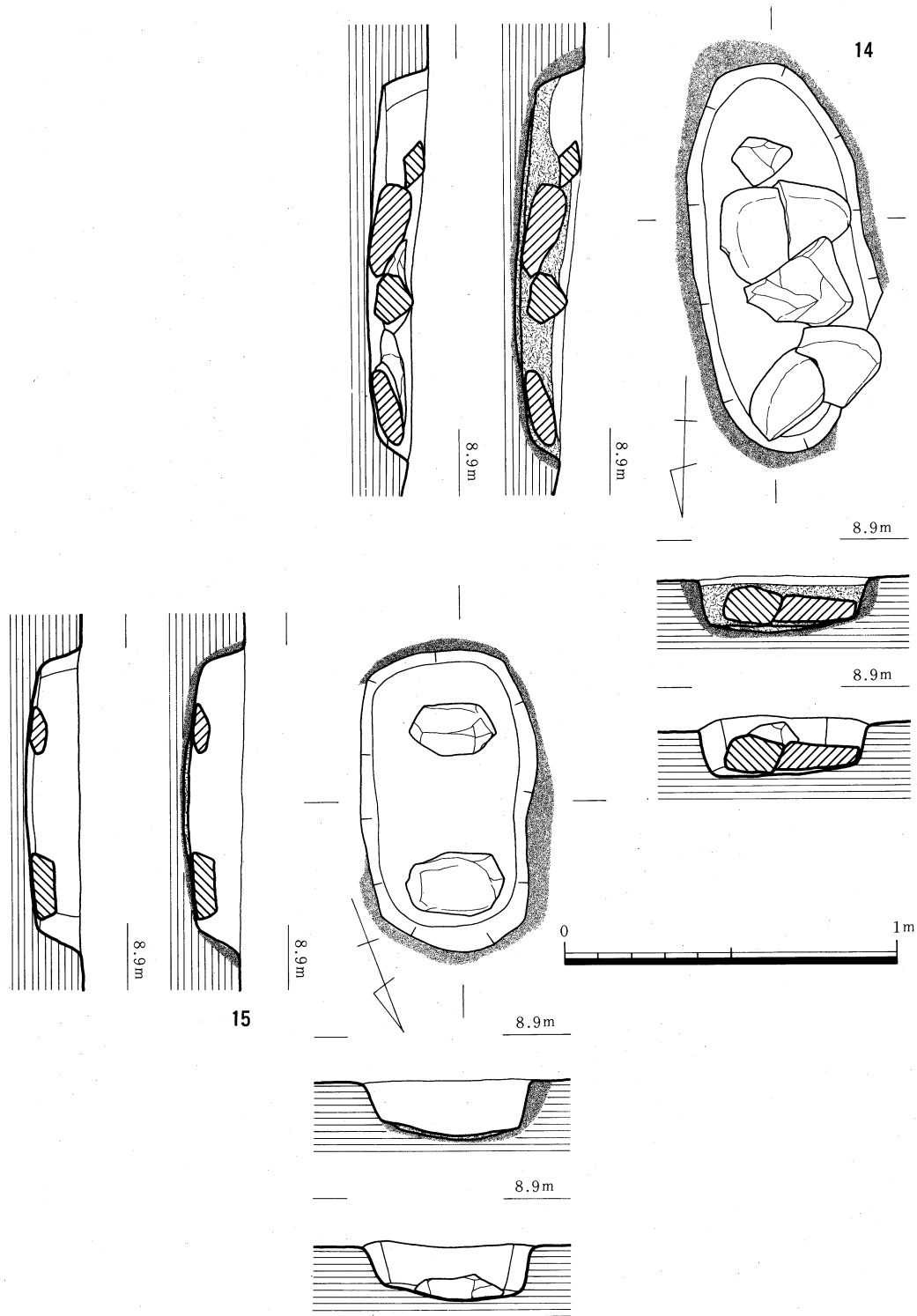
第9号火葬土壌北西約3mに位置する。主軸方向をN-33°-Wに置く。長さ100cm、幅60cmの楕円形を呈し、現存深さ25cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。墳内には、南に長さ25cm、幅20cm、厚さ10cmを測る石1個、北に長さ25cm、幅20cm、厚さ8cmを測る石1個があり、それを棺台石としている。土層観察では、棺台石の下に焼土層が2層、その間に炭化層が確認される。火葬骨は棺台石周辺から多量に出土したが小片ばかりであった。土師器等の遺物は出土しなかった。

第17号火葬土壌（第11図、図版10）

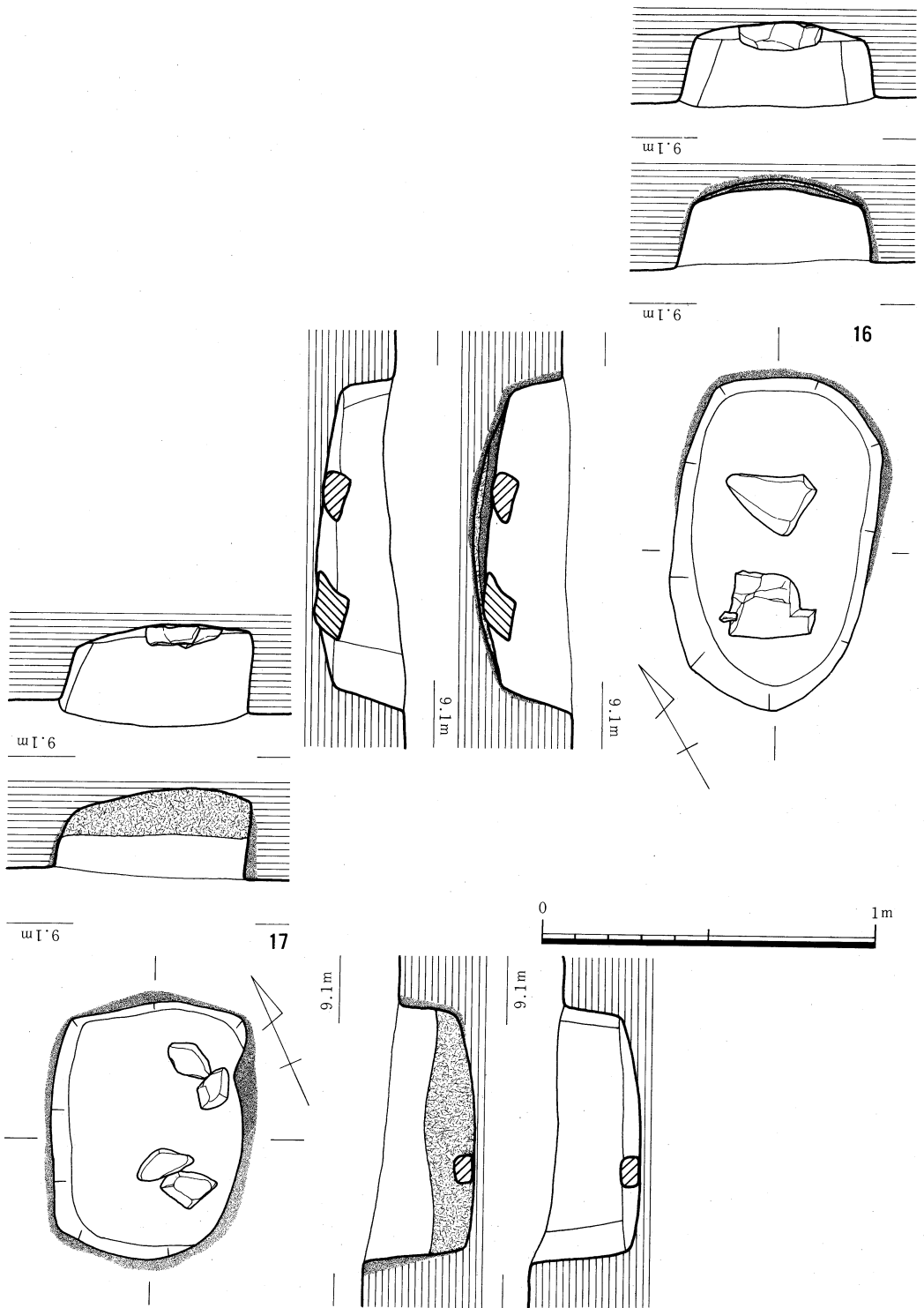
第16号火葬土壌の北西約1.7mに位置する。主軸方向はN-25°-Wに置く。長さ77cm、幅57cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ30cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。墳内には、長さ15cm、幅10cm、厚さ5cmを測る石が計4個あり棺台石としている。棺台石の表面は火を受けて赤変している。土層観察では、壁部に厚さ約2～5cmの焼土層が確認されることから、墳内においては壁の上部が特に火を受けたことがわかる。しかし、棺台石の下に炭灰層は確認できない。火葬骨及び土師器等の遺物は出土しなかった。

第18号火葬土壌（第12図、図版10）

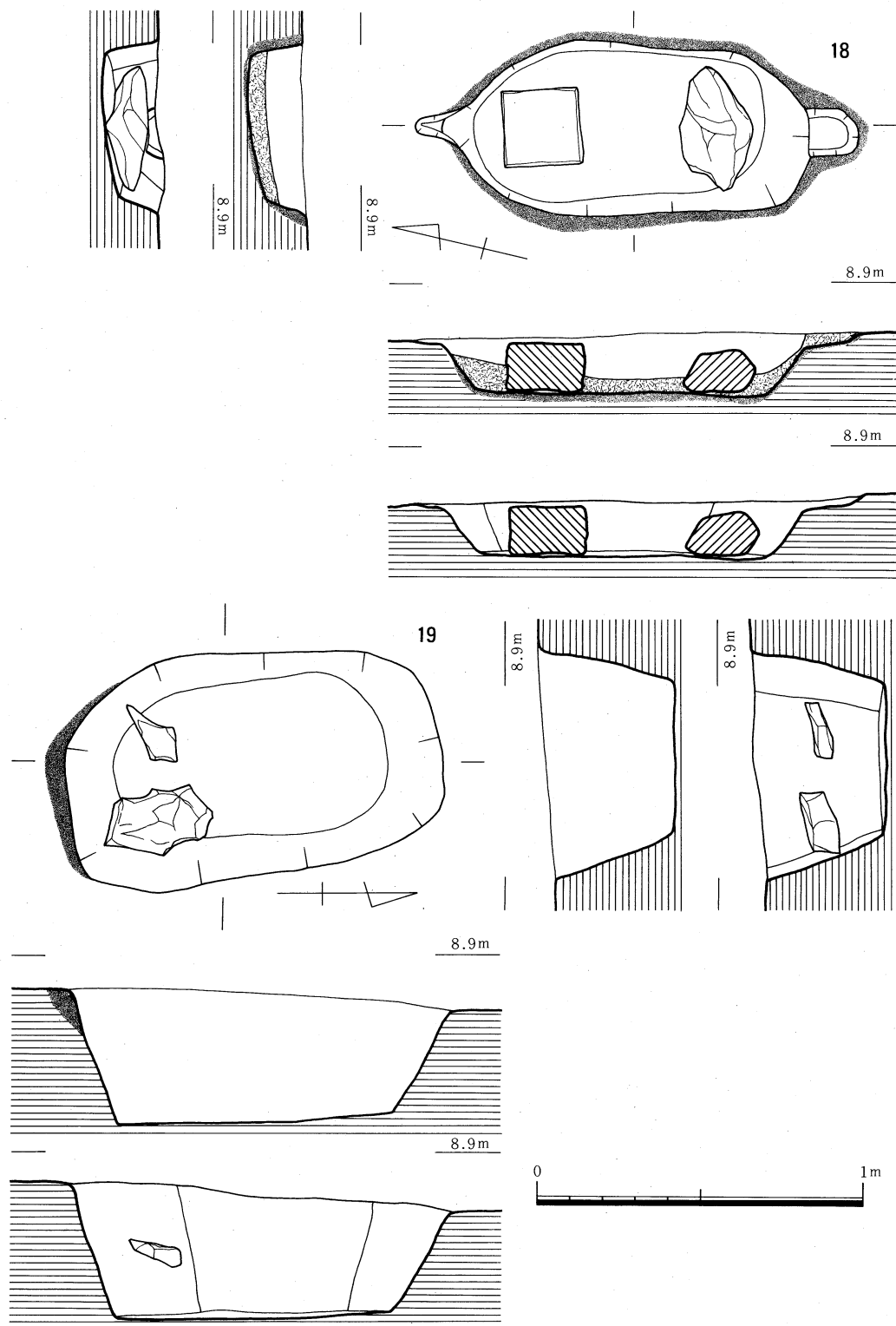
第17号火葬土壌の東約5.7mに位置する。主軸方向はN-13°-Eに置く。長さ135cm、幅52cmの楕円形を呈し、現存深さ18cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。南北両端に煙道がある。墳内には、南に長さ37cm、幅23cm、厚さ13cmの石1個と、北に1辺が23cm高さ15cmの直方体の砂岩質角石1個が置かれ、棺台石としている。特に北側の棺台石は全面を面取りした五輪塔の1部であることから、五輪塔の棺台石への転用が認められる。また、棺台石は両者共に火を受け表面が赤変していた。土層観察では南側煙道部に炭灰層が充填し、墳内でも厚さ約4～10cmの堆積が確認できる。また、壁及び底部には厚さ約2～4cmの焼土層がみら



第10图 第14、15号火葬土坑实测图 (1 / 20)



第11图 第16、17号火葬土坑实测图 (1 / 20)



第12图 第18、19号火葬土壤实测图 (1 / 20)

れることから、火を直接受けたことがわかる。しかし、棺台石の下に炭灰層はみられなかった。火葬骨は南側棺台石付近から出土したが、微量で小片ばかりであった。土師器等の遺物は出土しなかった。

第19号火葬土壙（第12図、図版12）

第18号火葬土壙の北西約2.2mに位置する。主軸方向をほぼN-Sに置く。長さ115cm、幅70cmの楕円形を呈し、現存深さ40cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。壙内には、長さ32cm、幅20cm、厚さ10cmを測る石と長さ23cm、幅10cm、厚さ6cmを測る石が底より15cm浮いた状態で出土した。この2個の石は棺台石で、拾骨の際移動したと考えられる。また、棺台石は両者共に火を受けその表面は赤変している。土層観察では南側の壁に厚さ7cmの焼土層がみられ、壙内でも特にその部分が火を受けたことがわかる。しかし、底部の下に炭灰層は確認できなかった。火葬骨も棺台石と同じく底より浮いた状態で出土した。微量で小片ばかりであった。土師器等の遺物は出土しなかった。

第20号火葬土壙（第13図、図版12）

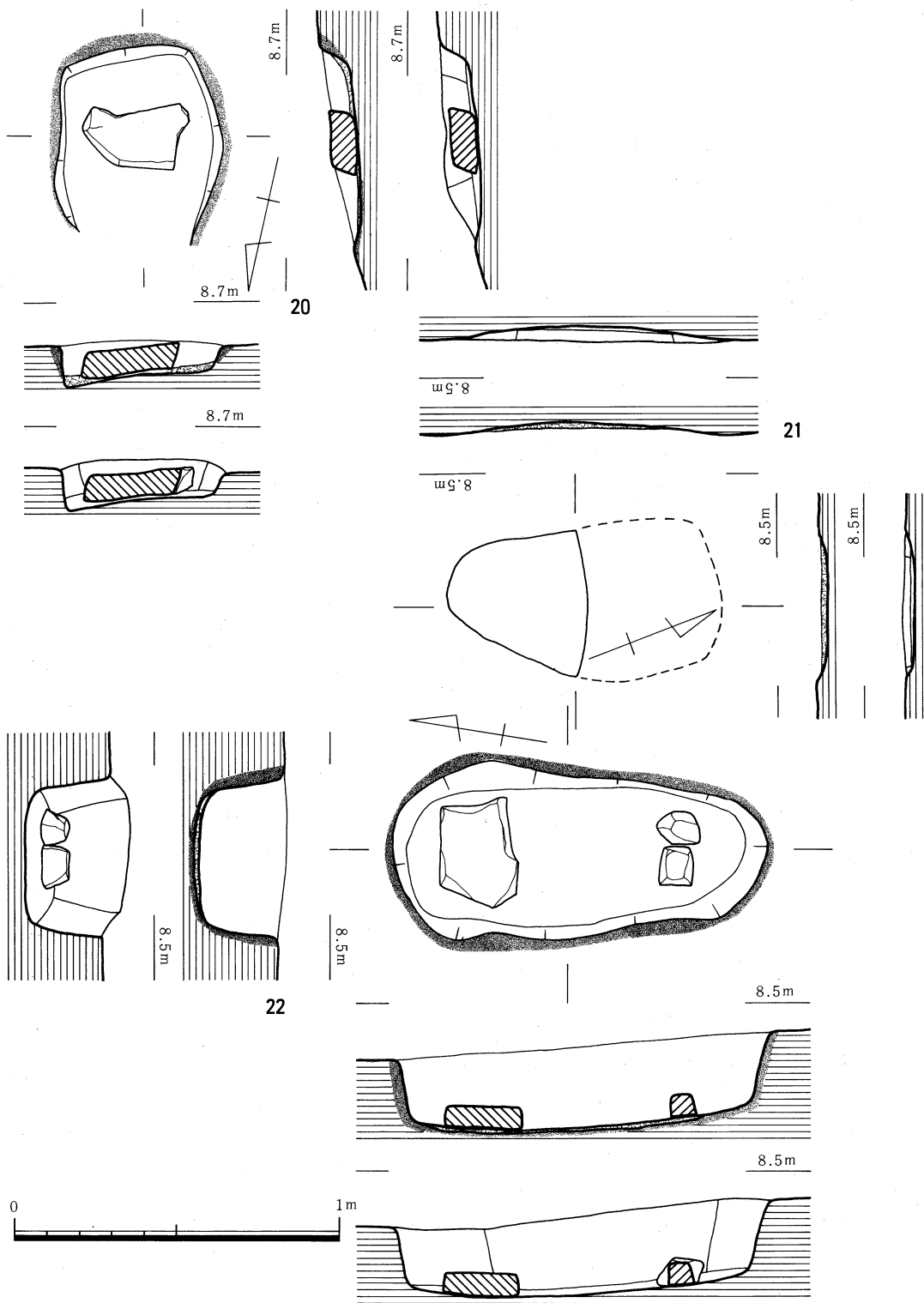
第19号火葬土壙の東約1.6mに位置する。主軸方向はN-12°-Wに置く。現存長さ65cm、幅50cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ10cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。壙内には長さ30cm、幅18cm、厚さ8cmを測る石が1個あり、それを棺台石としている。棺台石の表面は火を受け赤変している。土層観察では炭灰物が底部に2cm前後堆積し、壁には4cmの焼土層が確認できる。棺台石の下に炭灰層は確認されなかった。火葬骨は棺台石周辺及び壙内北端から出土したが微量で小片ばかりであった。土師器等の遺物は出土しなかった。

第21号火葬土壙（第13図、図版13）

第20号火葬土壙の東約7mに位置する。主軸方向はN-22°-Wに置く。長さ85cm、幅50cmの楕円形を呈し、現存深さ2cmを測る。壙内に、棺台石はなかった。土層観察では、壙内に炭灰物が充填しているのは確認できるものの、壁や底部に焼土層は確認できない。また、底部の下に炭灰層はみられなかった。火葬骨は出土したが、微量で小片ばかりであった。土師器等の遺物は出土しなかった。

第22号火葬土壙（第13図、図版13）

第20号火葬土壙の北東約3mに位置する。主軸方向はN-20°-Eに置く。長さ115cm、幅53cmの楕円形を呈し、現存深さ25cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。壙内には南に、長さ13cm、幅11cm、厚さ7cmを測る石2個、北に長さ33cm、幅22cm、厚さ8cmを測



第13图 第20、21、22号火葬土坑实测图 (1 / 20)

る石1個を置き、棺台石としている。棺台石の表面は火を受け赤変していた。土層観察では、壁及び底部に約2～4cmの焼土層がみられ、棺台石の下には焼土層が2層、その間に炭灰層が確認できる。火葬骨は南北両棺台石周辺から出土したものの、微量で小片ばかりであった。土師器等の遺物は出土しなかった。

第23号火葬土壇（第14図、図版14）

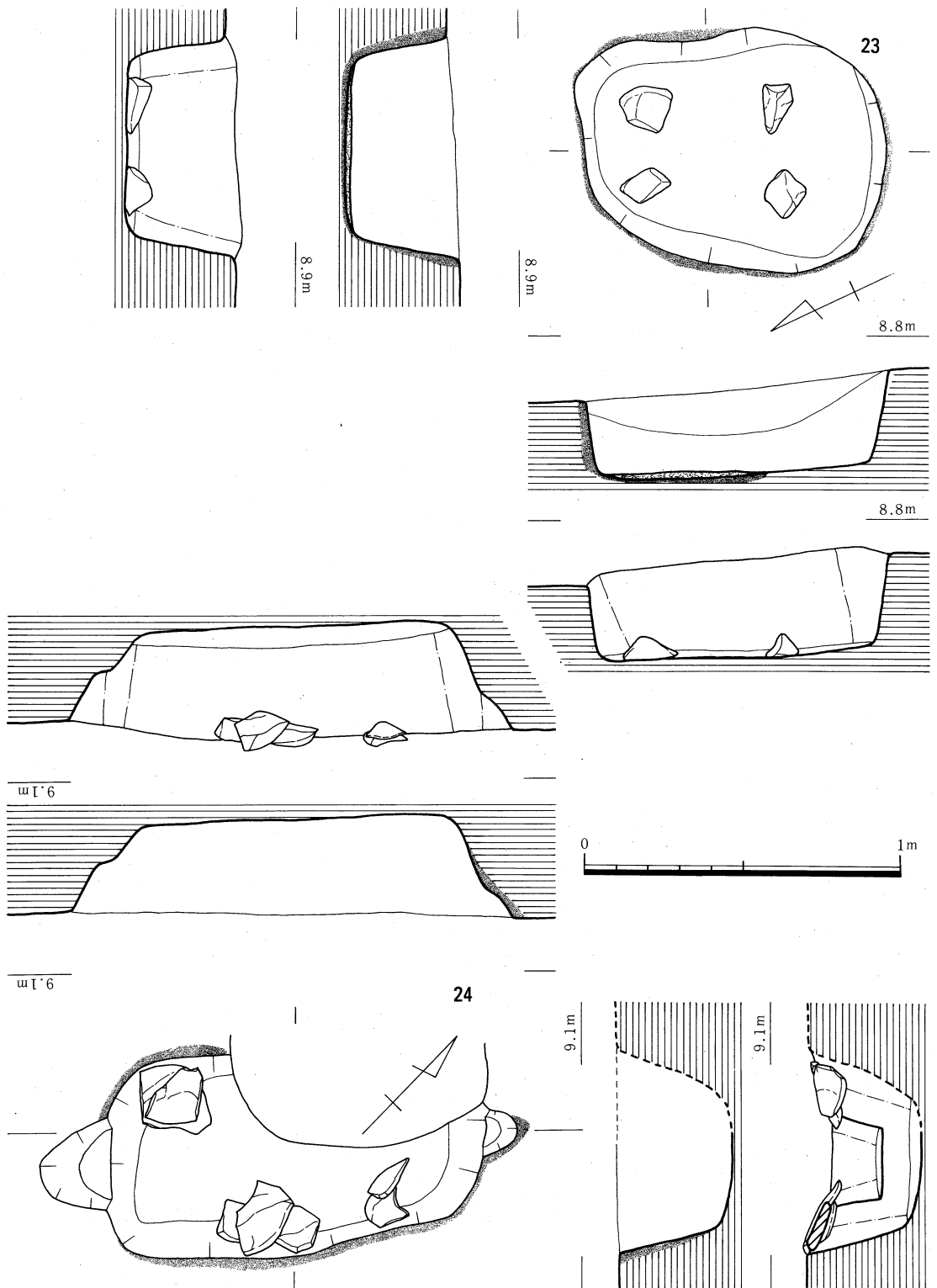
第22号火葬土壇の西約7.2mに位置する。主軸方向はN-25°-Eに置く。長さ95cm、幅75cmの楕円形を呈し、現存深さ33cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。壇内には、南に長さ15cm、幅10cm、厚さ9cmを測る石2個、北に長さ15cm、幅15cm、厚さ8cmを測る石2個が置かれ、棺台石としている。棺台石の表面は火を受け赤変している。土層観察では壁及び底部に約1～5cmの焼土層が確認できる。また、棺台石の下に焼土層が2層、その間に炭灰層が確認できる。火葬骨は南側の棺台石周辺から多量に出土したが小片ばかりであった。土師器等の遺物は出土しなかった。

第24号火葬土壇（第14図、図版15）

第17号火葬土壇に隣接し、それからきられている。主軸方向はN-46°-Wに置く。長さ150cm、幅63cmの楕円形を呈し、現存深さ30cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。壇内には長さ15～20cm、幅15～20cm、厚さ5cmを測る石7個が置かれ、棺台石としている。棺台石の表面は火を受けて赤変している。また、棺台石は7個すべて底部から約30cm浮いた状態で出土していることから、拾骨の際、壇内が乱れたものと考えられる。土層観察では、北側煙道の壁部に厚さ3cmの焼土層、そして第17号火葬土壇にきられているため西側は不明ではあるものの、東側壁部に厚さ3cmの焼土層が確認できる。壇内でも特に壁の上部が火を受けたことがわかる。しかし、底部の下に炭灰層は確認できなかった。火葬骨及び土師器等の遺物は出土しなかった。

第25号火葬土壇（第15図、図版15）

第9号火葬土壇の東約1.2mに位置する。主軸方向はN-20°-Wに置く。長さ100cm、幅49cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ12cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含んだ黒灰色粘質土である。壇内には、南に長さ30cm、幅20cm、厚さ6cmを測る石1個、北に長さ20cm、幅10cm、厚さ4cmを測る石2個を置き、棺台石としている。棺台石の表面は火を受け赤変していた。土層観察では底部に厚さ約2～4cmの炭灰物が堆積しているのが確認され、厚さ約3～5cmの焼土層が壁及び底部に確認される。ただし、棺台石の下に炭灰層は確認できなかった。火葬骨及び土師器等の遺物は出土しなかった。



第14图 第23、24号火葬土坑实测图 (1 / 20)

第26号火葬土壌（第15図、図版16）

第7号火葬土壌の北東約1.5mに位置する。主軸方向はN-5°-Eに置く。長さ155cm、幅25cmの楕円形を呈し、現存深さ10cmを測る。東端部には煙道がある。埋土は炭灰物、焼土を含んだ黒灰色粘質土である。壙内に棺台石は置かれていない。土層観察では、壙内南端部に炭灰物が厚さ6cm堆積していることが確認され、壁及び底部には約4～6cmの焼土層が確認できる。しかし、底部の下に炭灰層は確認できなかった。火葬骨は中央部から出土したが微量で小片ばかりであった。なお、壙内中央部の西端から八角形の白磁杯が出土した。この白磁杯を供献することにより火葬墓としたと想定し得る。

出土遺物（第17図、図版19）

第26号火葬土壌から八角形の白磁杯が出土した。口径7.5cm、器高3.4cm、底径3.6cmを測る。胎土は白色で硬く焼きしまっている。ほぼ完形ではあるものの、底部内側に汚染の跡がみられる。火を受けていないことから、遺体を茶毘に付した後に供献されたと思われる。森田勉氏の編年では15世紀に相当する。

第27号火葬土壌（第15図、図版17）

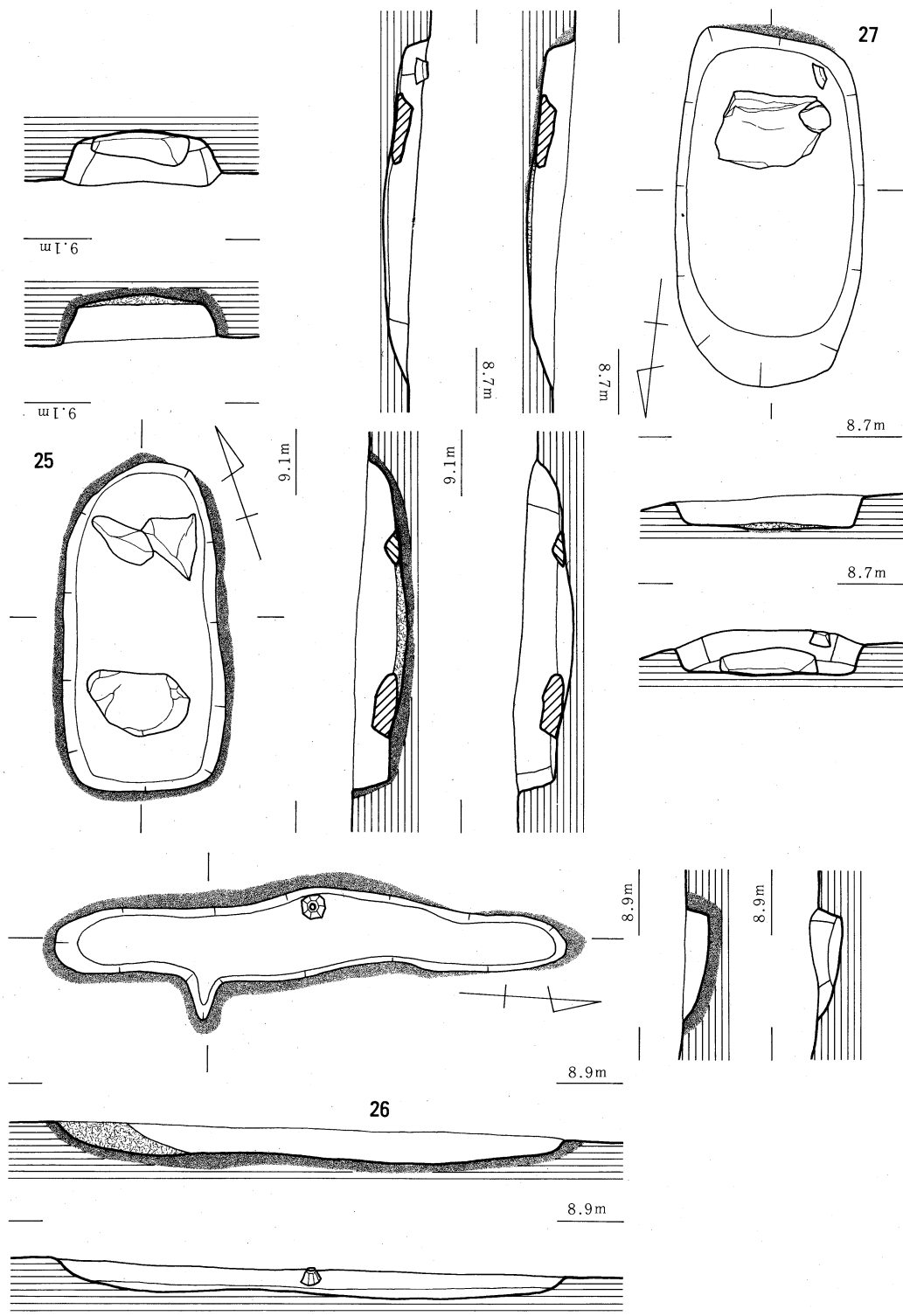
第13号火葬土壌の北約1.7mに位置する。主軸方向はN-7°-Eに置く。長さ105cm、幅58cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ11cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含んだ黒灰色粘質土である。壙内には南に長さ30cm、幅20cm、厚さ6cmを測る石1個が置かれ、棺台石としている。北にも棺台石が置かれていたと想定し得るが、検出し得なかった。棺台石の表面は火を受け赤変している。土層観察では、南側壁部から中央部底部にかけて厚さ約2～5cmの焼土層が確認できる。また、棺台石周辺に厚さ約1～2cmの炭灰層が確認できるが、棺台石の下に炭灰層は確認できなかった。火葬骨は棺台石周辺から出土したものの、微量で小片ばかりであった。土師皿小片1点が出土している。この土師皿を供献することによって火葬墓としたと想定し得る。

出土遺物

第27号火葬土壌から土師皿小片1点が出土したが、図示し得なかった。火を受けていないことから、遺体を茶毘に付した後、供献されたのであろう。

第28号火葬土壌（第16図、図版17）

第22号火葬土壌の北東約2.6mに位置する。主軸方向はN-17°-Wに置く。長さ106cm、幅57cmの楕円形を呈し、現存深さ10cmを測る。壙内には炭灰物が充填していた。壙内には長さ10～23cm、幅7～10cm、厚さ6cmを測る大小の石計6個を2個づつ南・中央・北に置き、棺台石としている。棺台石の表面は火を受け赤変している。土層観察では壁及び底部に焼土層は確認されなかった。また、棺台石の下に炭灰層は確認できない。火葬骨は、壙内の炭灰物にまじって出



第15图 第25、26、27号火葬土坑实测图 (1 / 20)

土はしたものの、微量で小片ばかりであった。土師器等の遺物は出土しなかった。

第29号火葬土壙（第16図、図版18）

第28号火葬土壙の南東約2 mに位置する。主軸方向はN-22°-Eに置く。長さ112cm、幅48cmの楕円形を呈し、現存深さ8 cmを測る。壙内北側には炭灰物が充填し、埋土の部分は炭灰物、焼土を含んだ黒灰色粘質土となっている。壙内から棺台石は検出されなかった。土層観察では、壁から底部にかけて焼土層及び炭灰層は確認できない。特に底部の下に炭灰層は確認できなかった。火葬骨は壙内中央部から出土はしたものの、微量で小片ばかりであった。壙内北部より土師皿片1点が出土している。この土師皿を供献することにより火葬墓としたと想定し得る。

出土遺物（第17図、図版19）

第29号火葬土壙から土師皿片1点が出土した。口径15.5cm、器高2.9cm、底径12.2cmを測る。体部はヨコナデ。内底部はナデられている。外底部は糸切りされるが、板目はみられない。火を受けていないことから、遺体を茶毘に付した後に供献されたと思われる。

(2) 土壙墓

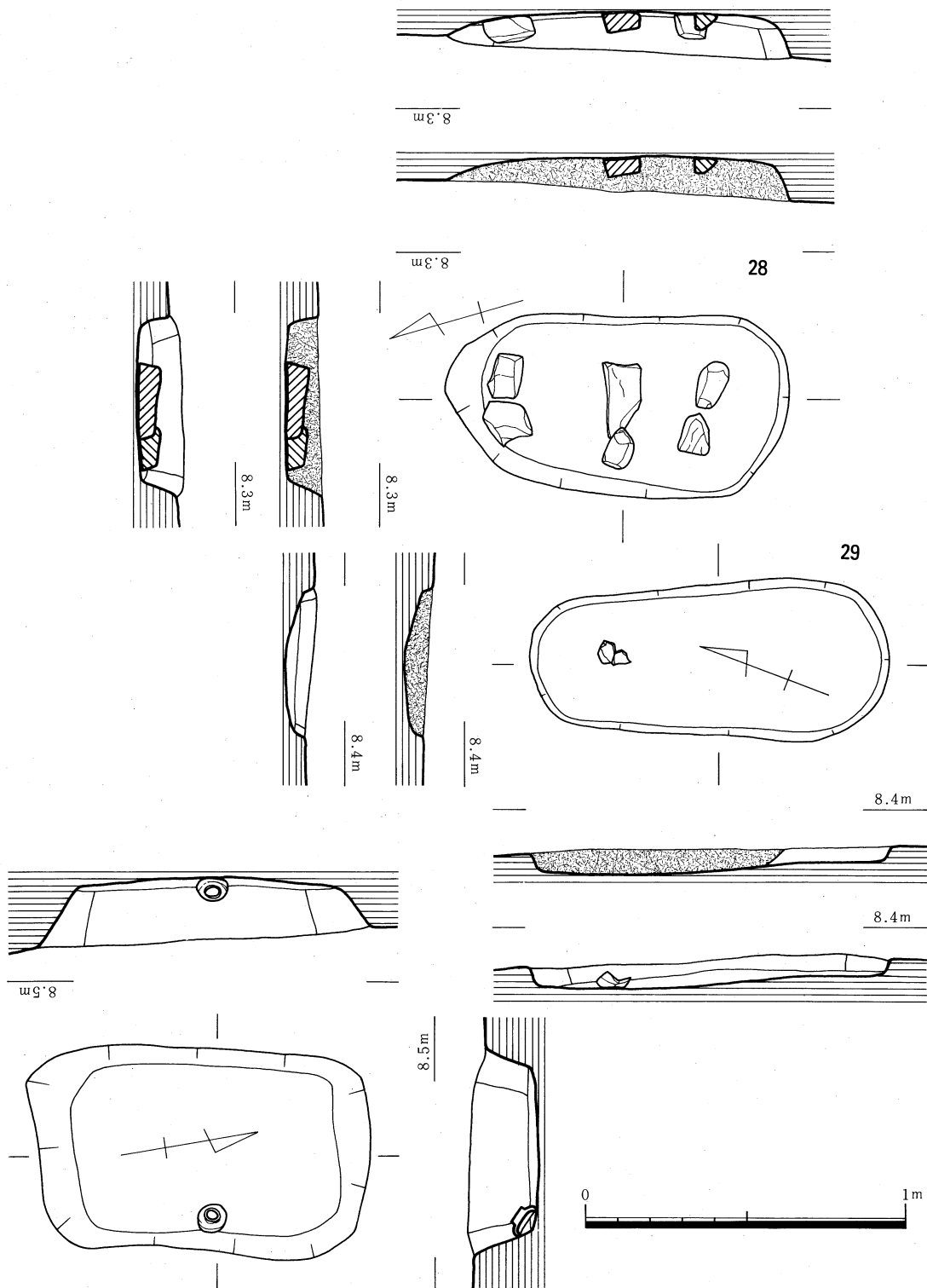
火葬土壙群に混じって1基検出された。この他、土壙墓と想定し得る遺構が調査区南端部に検出したが、削平を著しく受け本来の形状は知り得なかった。そのため、便宜上、供献品が埋納されていた1基のみをここでは土壙墓としている。

第1号土壙墓（第16図、図版18）

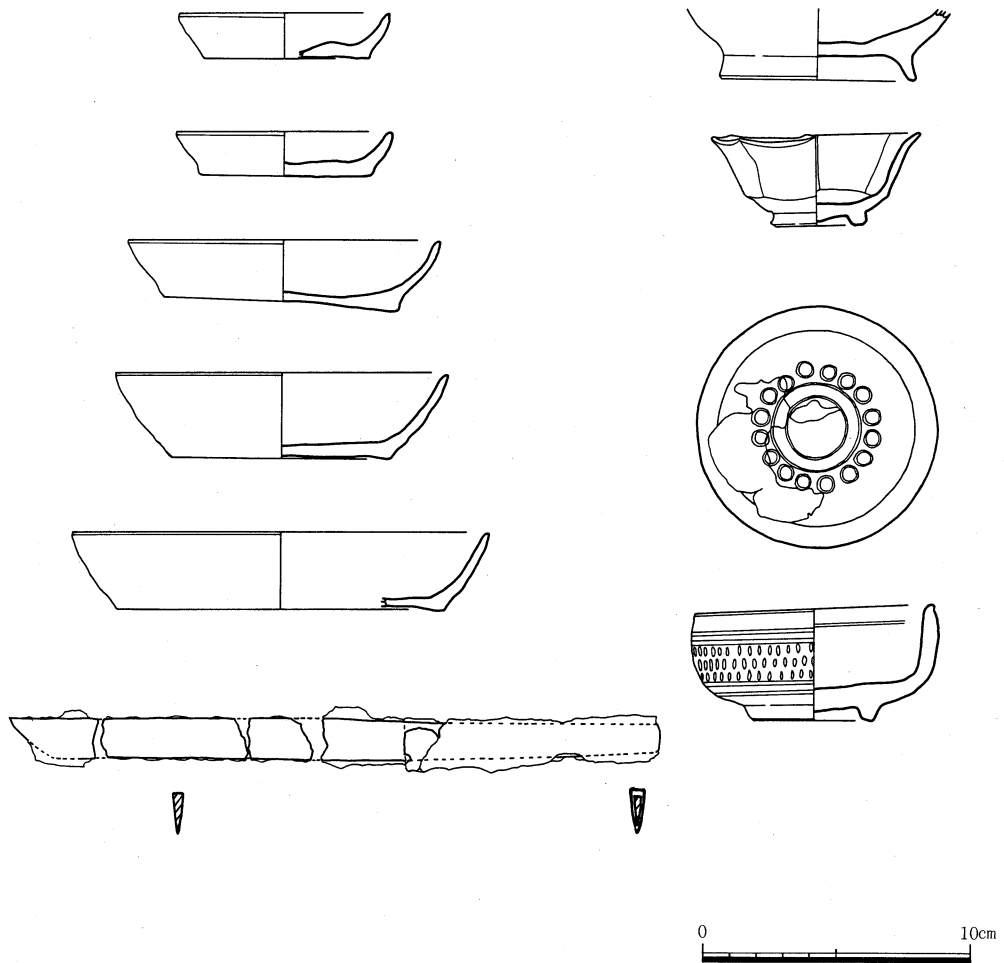
第13号火葬土壙の北約1.7mに位置する。主軸方向をN-10°-Wに置く。長さ103cm、幅63cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ20cmを測る。埋土は黒灰色粘質土である。底面は中央部付近がやや深くなっている。土壙の壁の傾斜はゆるやかで、断面形は舟底状をなす。上部は削平を受けており、本来の形状は知り得ない。なお、壙内東端から高麗青磁椀1点が出土している。

出土遺物（第17図、図版19）

第1号土壙測からは高麗青磁椀1点が出土している。口径8.8cm、器高4.4cm、底径4.4cmを測る完形品である。体部は丸味を有し、口縁部は若干直立している。色調は灰青色がかかった緑色である。内底部には円文の白色象嵌がみられる。高台の内面部をヘラで押したような痕跡があり、そのヘラで押された部分のみ施釉を欠いている。また、外底部には目跡を削った跡がある。森田勉氏の編年においては15世紀に相当する。



第16图 第28、29号火葬土坑、1号土坑墓实测图 (1/20)



第17図 上町木下遺跡出土遺物実測図（1 / 3）

(3) その他の遺構と遺物

第1号土坑

平面は長径110cm、短径40cmの楕円形を呈し、現存深さ9cmを測る。埋土は黒灰色粘質土である。上部は著しく削平を受けており、本来の形状は知り得ないが、土壇墓の可能性はある。遺物は出土しなかった。

第2号土坑

平面は長径80cm、短径50cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ20cmを測る。埋土は黒灰色粘質土である。上部は著しく削平を受けており、本来の形状は知り得ないが、土壇墓の可能性はある。遺物は出土しなかった。

第3号土壌

平面は長径100cm、短径50cmの楕円形を呈し、現存深さ14cmを測る。埋土は黒灰色粘質土である。上部は著しく削平を受けており、本来の形状は知り得ないが、土壌墓の可能性はある。遺物は出土しなかった。

第4号土壌

平面は長径120cm、短径70cmの楕円形を呈し、現存深さ13cmを測る。埋土は黒灰色粘質土である。上部は著しく削平を受けており、本来の形状は知り得ないが、土壌墓の可能性はある。遺物は出土しなかった。

第5号土壌

平面は長径120cm、短径50cmの楕円形を呈し、現存深さ28cmを測る。埋土は黒灰色粘質土である。上部は著しく削平を受けており、本来の形状は知り得ないが、土壌墓の可能性はある。遺物は出土しなかった。

第6号土壌

平面は長径110cm、短径70cmの楕円形を呈し、現存深さ16cmを測る。埋土は黒灰色粘質土である。上部は著しく削平を受けており、本来の形状は知り得ないが、土壌墓の可能性はある。遺物は出土しなかった。

第7号土壌

平面は長径100cm、短径40cmの楕円形を呈し、現存深さ10cmを測る。埋土は黒灰色粘質土である。上部は著しく削平を受けており、本来の形状は知り得ないが、土壌墓の可能性はある。遺物は出土しなかった。

第8号土壌

平面は長径80cm、短径60cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ15cmを測る。埋土は黒灰色粘質土である。上部は著しく削平を受けており、本来の形状は知り得ない。遺物は出土しなかった。

第9号土壌

平面は長径90cm、短径50cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ37cmを測る。埋土は黒灰色粘質土である。上部は著しく削平を受けており、本来の形状は知り得ない。遺物は出土しなかった。

第1号溝

調査区の中央部やや南側に位置し、ほぼ東西方向に流れる。現存幅50cm、深さ10cmを測る。埋土はレキを含む黒灰色粘質土である。遺構は第16号火葬土壇にきられている。遺物は出土しなかった。

包含層出土遺物（第18図）

土師器

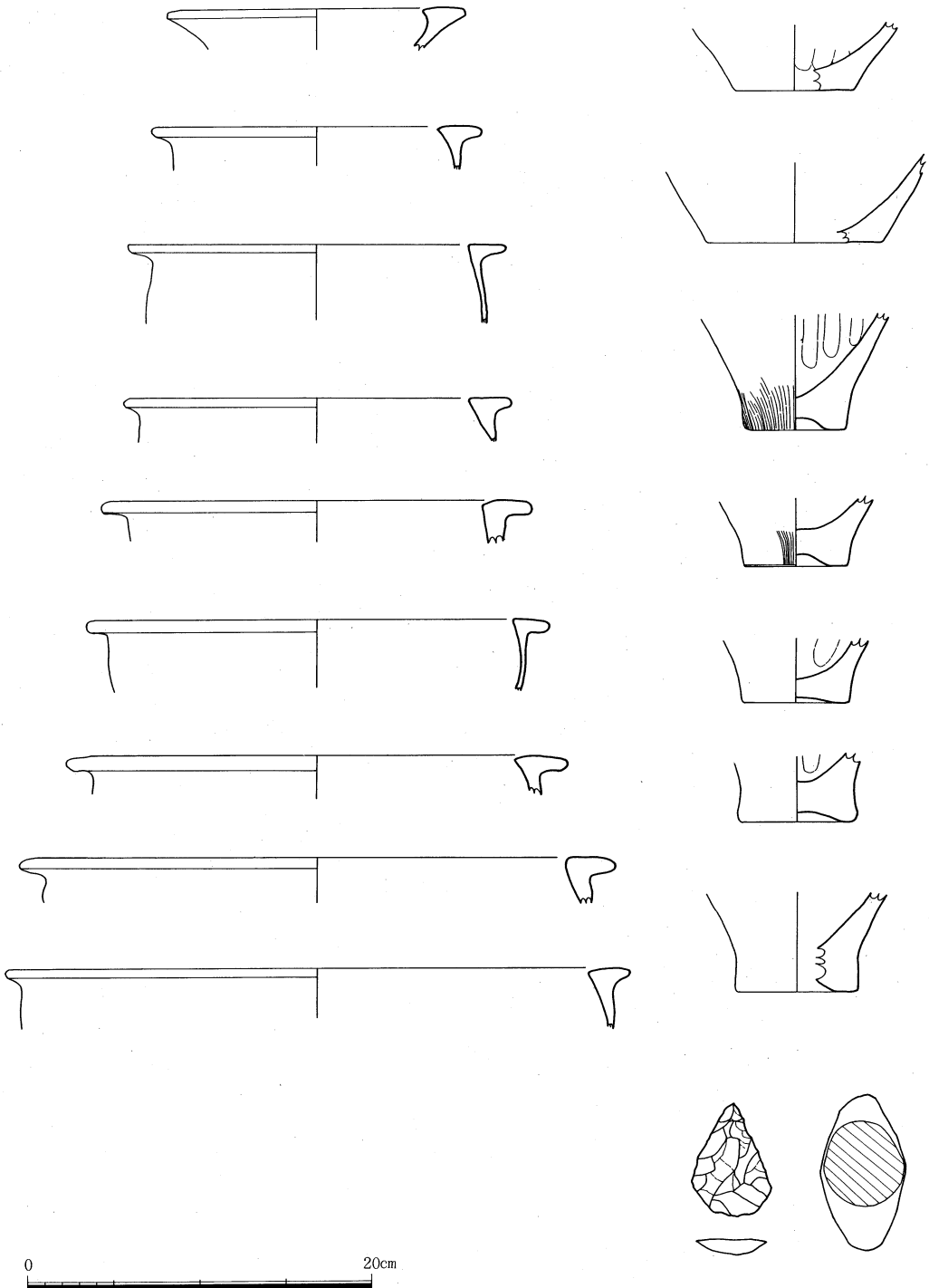
試掘及び火葬土壇たち割りの際、中世の遺構面の下から弥生式土器が多数出土した。しかし、小片ばかりであり図示し得なかった。

石器

第27号火葬土壇たち割りの際、弥生から平安時代にかけての包含層の中から出土した。長さ3.3cm、幅2.2cm、厚さ4cmを測る石鏃で重量2.5gである。材質は黒曜石でほぼ完形である。

土弾

第13号火葬土壇たち割りの際、弥生から平安時代にかけての包含層の中から出土した。長さ4.7cm、幅2.4cmを測る土弾で重量22gである。



第18図 上町木下遺跡出土遺物実測図 (1/ 4 石器、土弾のみ 1/ 2)

Ⅲ. おわりに

(1) 火葬土壌

今回の調査で計29基の火葬土壌を検出した。まず、遺構群が使用された年代であるが29基のなかでその年代を示す遺物を埋納していたのは第1・11・26・27・29号の計6基である。第1・11号から出土した土師皿は山本信夫氏の^{注①}編年によるとXIX期に相当し、14世紀前半までさかのぼることができる。第26号から出土した八角形の白磁杯は森田勉氏の^{注②}編年によると15世紀に納まる。第27号から出土した土師皿は図示し得ない程の細片であり、第29号から出土した土師皿も細片で年代は不明である。以上のように出土遺物が数点のみで如何ともしがたいが、方形を呈する墓域で29墓もの遺構が群集し、きりあい関係がほとんどみられないことを考慮して、火葬土壌群の使用された年代は14世紀前半から15世紀代に位置づけられよう。

次にこれら遺構群は検出状況から大きく2つに分類できる。1つは壙内に棺台を置くもの、もう1つは壙内に棺台を置かないものである。

壙内に棺台を置く遺構は壙内に1～7個の石もしくはその代りとなる物を置き棺台とし、その上に棺を置いて茶毘に付したと考えられる。遺構の法量が長いものでも150cm、平均して100cm前後、幅60cm前後を測ることから使用される棺は長さ約100cm、幅約60cm程度のもの以下でないと壙内に収まらない。また、土壌内における通風や棺材の厚さを考慮すると内法はかなり小さなものとなり、かなり窮屈な状態で遺体が棺に収められたと想定し得る。この状況から、成人の遺体を伸展した状態で棺に収めて、茶毘に付すことは不可能であり、踞坐した状態で遺体を棺に収めて、茶毘に付したと考えられる。壙内に棺台を置かない遺構と大きく異なる点は土層観察で焼土層が壁及び底部に程度の差はあれ確認できることである。さらに、棺台石の下に焼土層が2層、その間に炭灰層が確認され同一土壌内で2回以上使用されたことが判明した遺構があり、その割合は棺台石を壙内に置く遺構の約40%にも及ぶ。その他にも壁から底部にかけて焼土層がみられ、複数回使用されたと考えられる遺構もあるが現状での判断は難しい。今後の資料の増加を待ち再検討する必要がある。

一方、壙内に棺台を置かない遺構は削平を受け残存状況は良くない。そのため壙内に棺台がない理由として、拾骨の際に棺台まで取りのぞかれたか、もしくは削平の際に棺台まで消失してしまったとも考えられる。しかし、篠振遺跡^{注③}から壙内に棺台を置かず、壙上に太い木材を用いて棺台としたと想定し得る同時期の遺構が検出されていることを考慮に入れると、第3・5・9・21・26・29号はその類に入る可能性がある。なかでも第26号は長さ155cmを測るものの、幅はわずか25cmである。この状況から遺体を茶毘に付す際、第26号には壙上に棺台もしくはそれに代わる上部構造物があったことを想定する必要がある。また、遺構の長さが155cmもある

ことから遺体は跏坐した状態ではなく伸展した状態で棺に収められ茶毘に付された可能性もあることを考えておく必要がある。

では、いかなる階層の人々がこの遺構群で茶毘に付されたのであろうか。最後にこの点について所見を述べたいと思う。遺構群の使用された時期に含まれると思われる応永5年(1398年)の史料に『観智院法印御房中陰記 応年五年』^{注④}があり高僧の没後の葬法などを詳しく記載している。その中に「一、御茶毘用意事」として計三貫三百文とある。しかし、それでも費用は不足し直接茶毘に要した費用は追加分を含めて五貫百文となっている。若干時代は下るが天文元年(1532年)の『摂津尼崎墓所掟』^{注⑤}には庶民の葬送にいか程の費用が掛かったか記されている。この史料によると上は火葬から収骨まで一貫五百文から、下はただ筵に入れるだけの十文までさまざまな葬法があったことがわかる。このことから、庶民間でも上は下に比べ150倍もの費用を茶毘に付すために要しており、また地位に比例してその費用も増額したことがわかる。上記2つの史料をこの遺構群と直接関係付けることはできないが、少なくともここで実施された火葬も筵で遺体をまく葬法や土葬に比べかなりの費用がかかったことはいかがわられる。以上を考えあわせると、この遺構群を使って茶毘に付されたのはその多額にのぼる費用を負担し得た経済的に裕福な階層の人々であったと想定し得る。

(2) 土壌墓

火葬土壌群のなかに混じって1基検出した。出土した高麗青磁碗^{注⑥}から15世紀代のものとみられ火葬土壌群と使用されていた時期を同じくする。このことは15世紀代当地域において遺体を茶毘に付す火葬と遺体を棺に入れるかもしくはそのまま直接墳に埋める土葬が平行して行われていたことを意味する。別の見方をすれば、宗派及び階層によるちがいから葬法に相違が生じたとも考えられるが現状での判断は難しい。この点についても今後の資料の増加を待ち再検討する必要がある。

注① 山本信夫「統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて－」『九州上代文化論集－乙益重隆先生古稀記念論文集－』(1990年)

注② 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」(『貿易陶磁研究』第2号・1982年)

注③ 山本信夫・狭川真一編「篠振遺跡」(太宰府市教育委員会・1987年)

注④ 水藤 真『中世の葬送・墓制』(吉川弘文館・1991年)

注⑤ 『大覚寺文書』(『日本思想大系 中世政治・社会思想』下 196頁所収)

注⑥ 森田 勉「北部九州出土の高麗陶磁器－編年試案－」(『貿易陶磁研究』第5号・1985年)

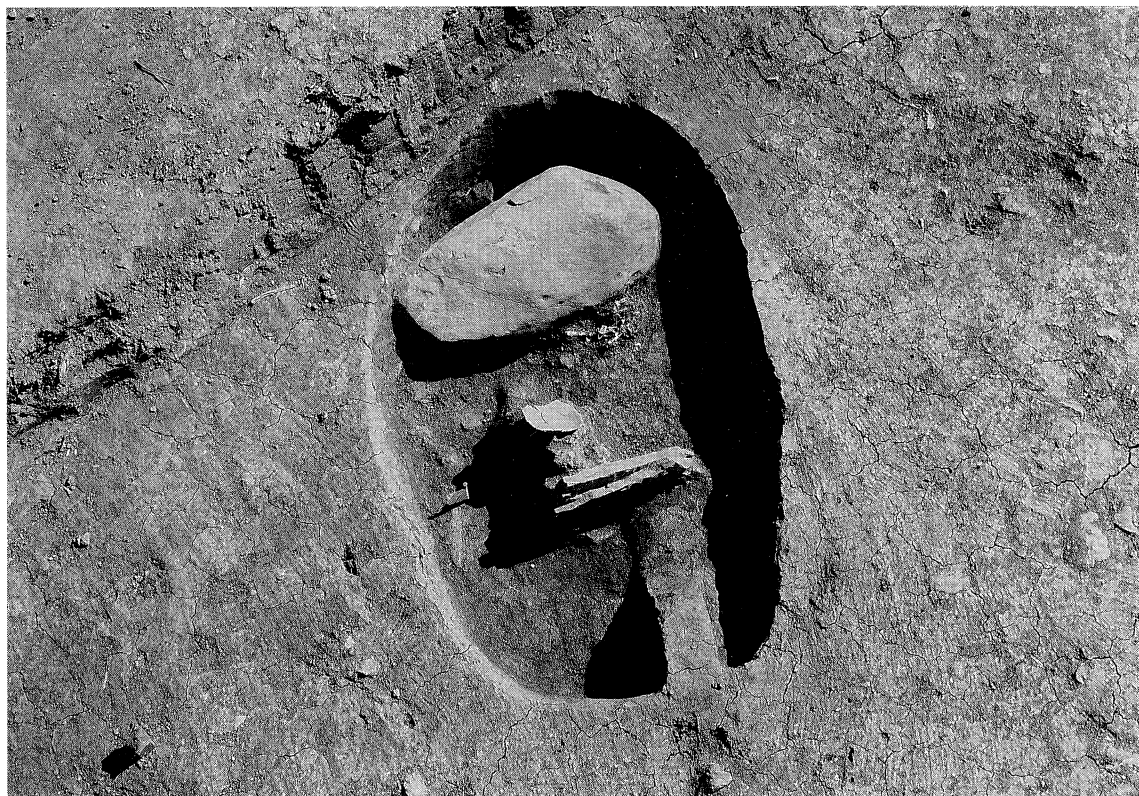
番号	平面図	規模 (長×幅×深)	方位	人骨の有無	棺台石の有無	副葬品	備考
1号	楕円形	117×80×15	N-25° -E	多量小片	南北に各1石	土師皿1点	焼土層2層有り
2号	楕円形	105×58×23	N-S	微量小片	南に2石 北に1石 (南には礎石転用)	刀子1点	
3号	隅丸長方形	75×43×4	N-5° -W	微量小片			
4号	楕円形	75×50×5	N-6° -E		壙内に5石		
5号	楕円形	48×65×15	N-15° -W	微量小片			
6号	隅丸長方形	100×68×25	N-16° -W	微量小片	南北に各2石		焼土層2層有り
7号	隅丸長方形	80×47×20	N-13° -W	微量小片	南に1石 北に2石		
8号	隅丸長方形	92×59×43	N-S	微量小片	壙内に2石		
9号	楕円形	83×60×10	N-10° -E				
10号	楕円形	100×65×10	N-22° -W	多量小片	壙内に7石		
11号	楕円形	94×68×22	N-8° -W	微量小片	壙内に7石	土師皿1点	焼土層2層有り
12号	隅丸長方形	118×53×15	N-18° -W	微量小片	南北に各1石		焼土層2層有り
13号	楕円形	109×78×20	N-17° -E	微量小片	壙内に6石		
14号	楕円形	117×53×15	N-S	微量小片	壙内に6石		焼土層2層有り
15号	楕円形	91×50×15	N-20° -W	微量小片	南北に各1石		焼土層2層有り
16号	楕円形	100×60×25	N-33° -W	多量小片	南北に各1石		焼土層2層有り
17号	隅丸長方形	77×57×30	N-25° -W		壙内に4石		
18号	楕円形	135×52×18	N-13° -E	微量小片	南北に各1石 (北は五輪塔転用)		
19号	楕円形	115×70×40	N-S	微量小片	壙内に2石 (拾骨で移動)		
20号	隅丸長方形	65×50×10	N-12° -W	微量小片	壙内に1石		
21号	楕円形	85×50×2	N-22° -W	微量小片			
22号	楕円形	115×53×25	N-20° -E	微量小片	南に2石 北に1石		焼土層2層有り
23号	楕円形	95×75×33	N-25° -E	多量小片	南北に各2石		焼土層2層有り
24号	楕円形	150×63×30	N-46° -W		壙内に7石		
25号	隅丸長方形	100×49×12	N-20° -W		南に1石 北に2石		
26号	楕円形	155×25×10	N-5° -E	微量小片		白磁杯1点	
27号	隅丸長方形	105×58×11	N-7° -E	微量小片	南に1石 (北は?)	土師皿1点	
28号	楕円形	106×57×10	N-17° -W	微量小片	壙内に6石		
29号	楕円形	112×48×8	N-22° -E	微量小片		土師皿1点	

第1表 火葬土壌一覧表

版 圖



上町木下遺跡調査地点全景（東から）



a. 第1号火葬土壙（北から）



b. 第1号火葬土壙土層（東から）



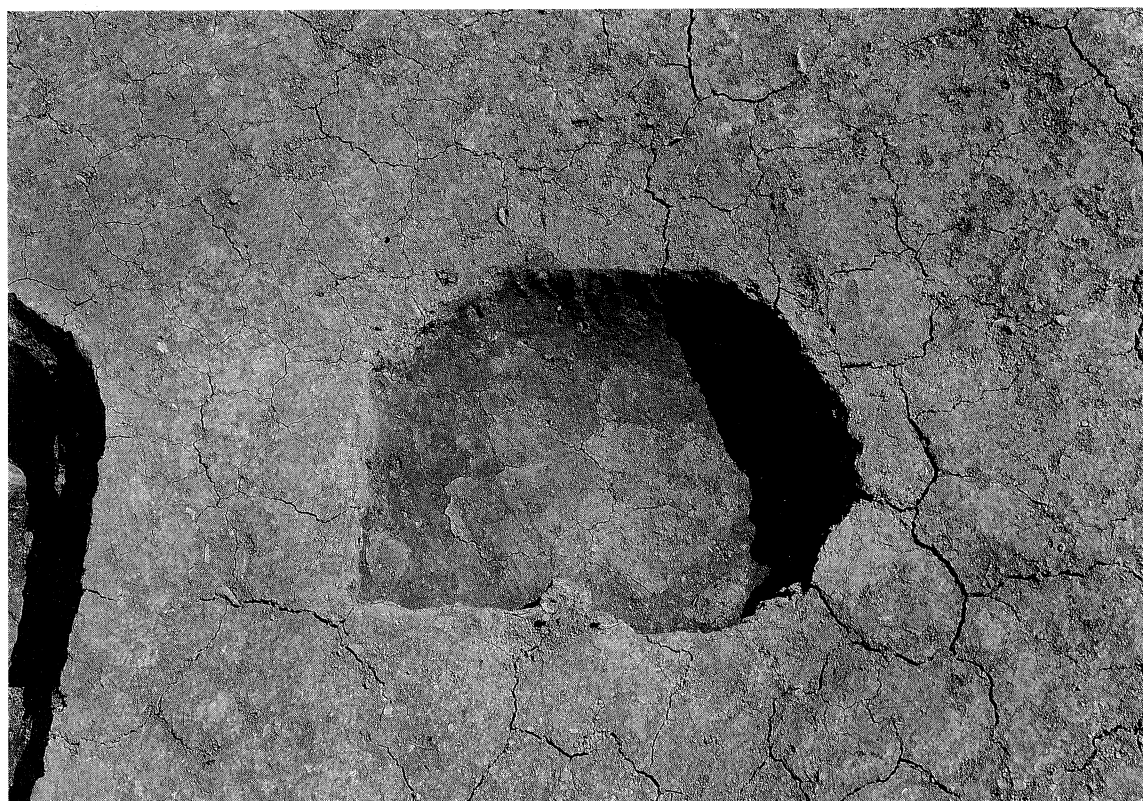
a. 第2号火葬土壙（北から）



b. 第3号火葬土壙（北から）



a. 第4号火葬土壙（北から）



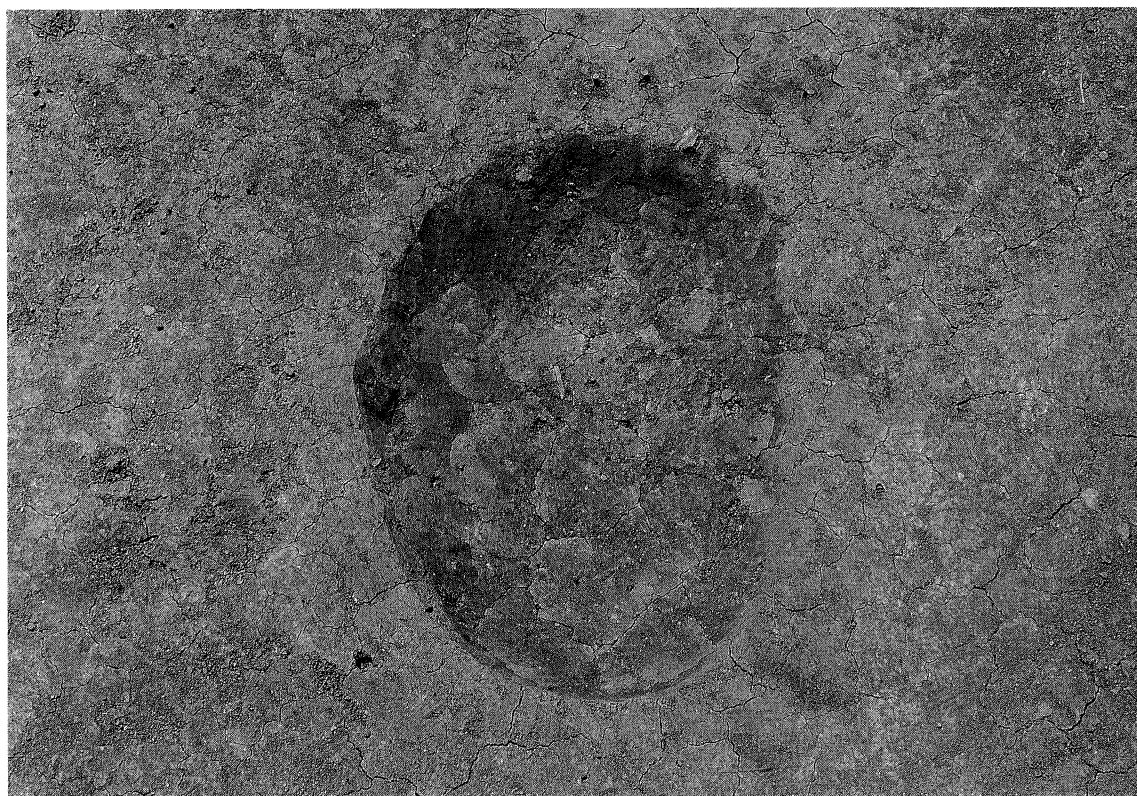
b. 第5号火葬土壙（北から）



a. 第6、7号火葬土壙（北から）



b. 第8号火葬土壙（北から）



a. 第9号火葬土壌（北から）



b. 第10号火葬土壌（北から）



a. 第11号火葬土壙（北から）



b. 第12号火葬土壙（北から）



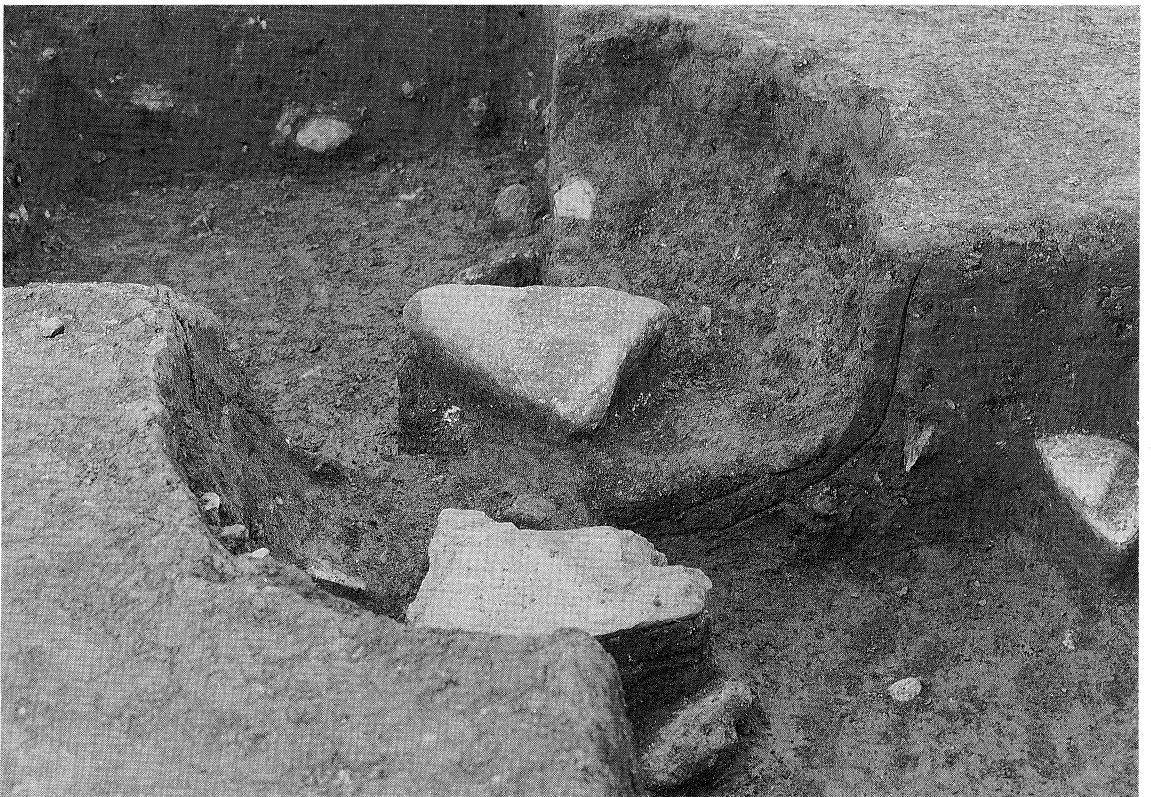
a. 第13号火葬土壙（北から）



b. 第14、15号火葬土壙（北から）



a. 第16号火葬土壌（北から）



b. 第16号火葬土壌土層（南から）



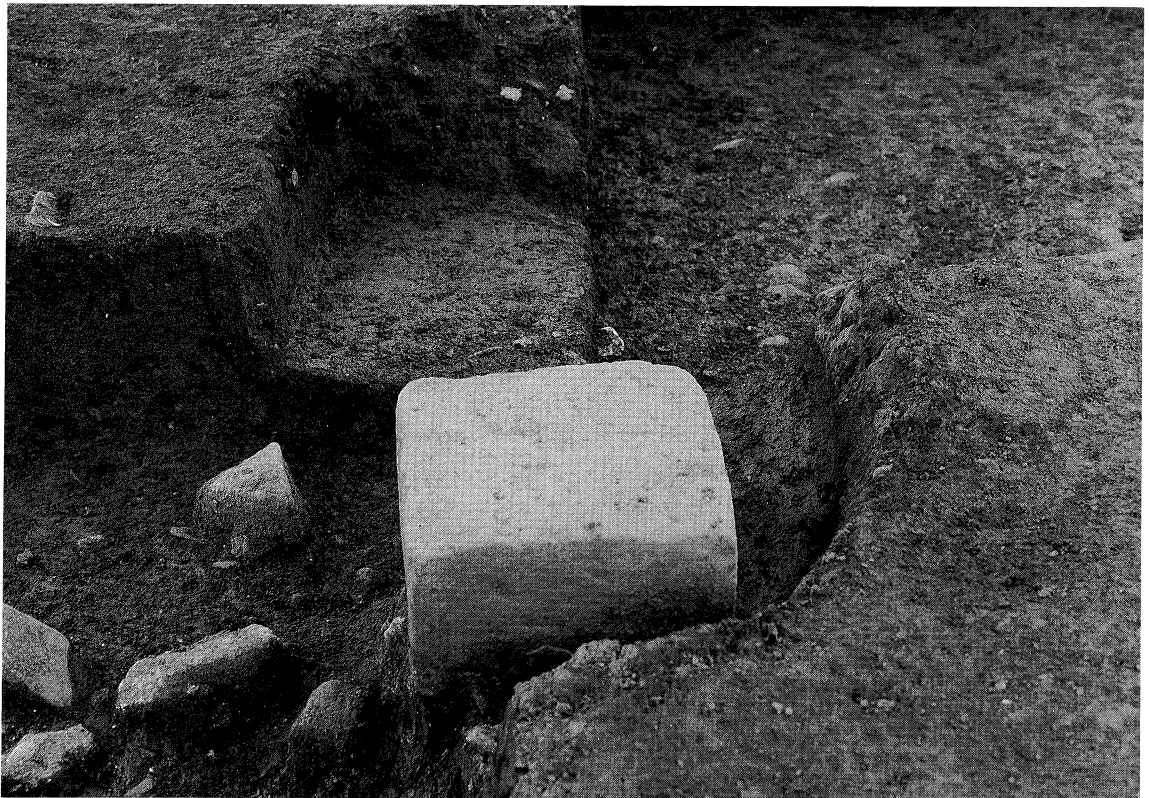
a. 第17号火葬土壙（北から）



b. 第18号火葬土壙（北から）



a. 第18号火葬土壇土層（東から）



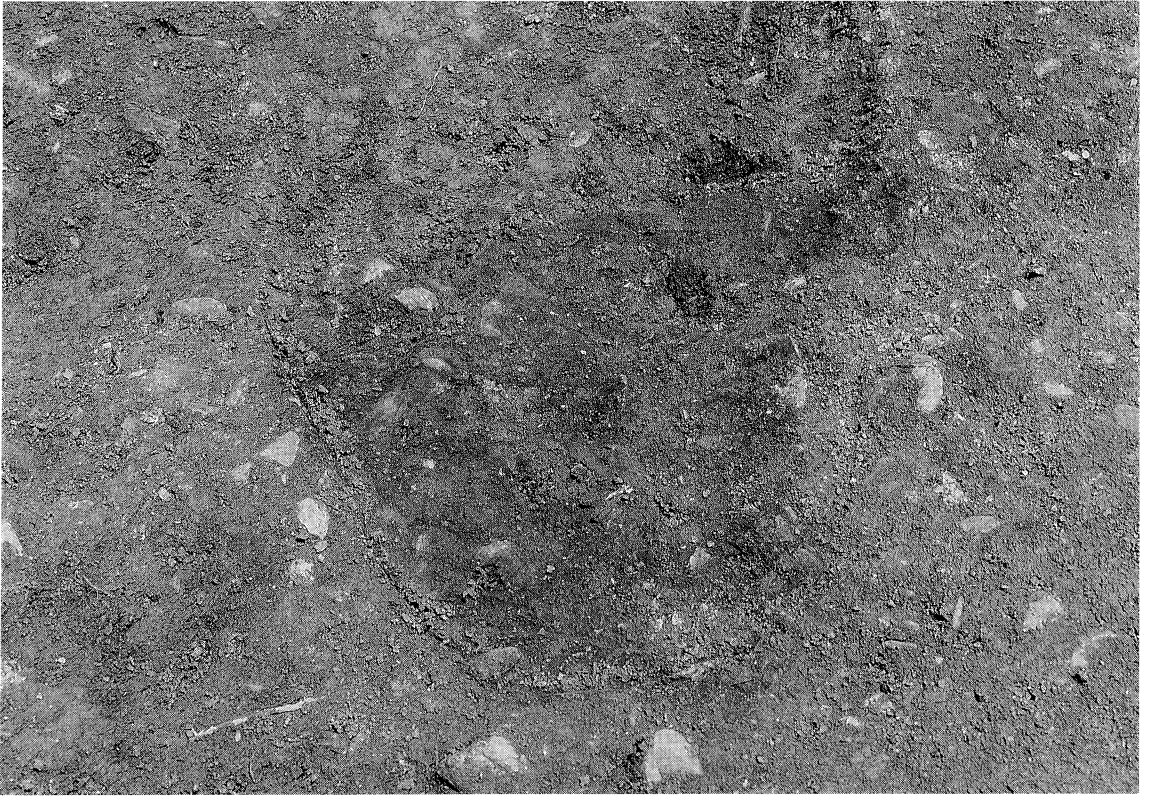
b. 第18号火葬土壇土層（北から）



a. 第19号火葬土壙（北から）



b. 第20号火葬土壙（北から）



a. 第21号火葬土壌（南から）



b. 第22号火葬土壌（北から）



a. 第22号火葬土壇土層（西から）



b. 第23号火葬土壇（北から）



a. 第24号火葬土坑（南から）



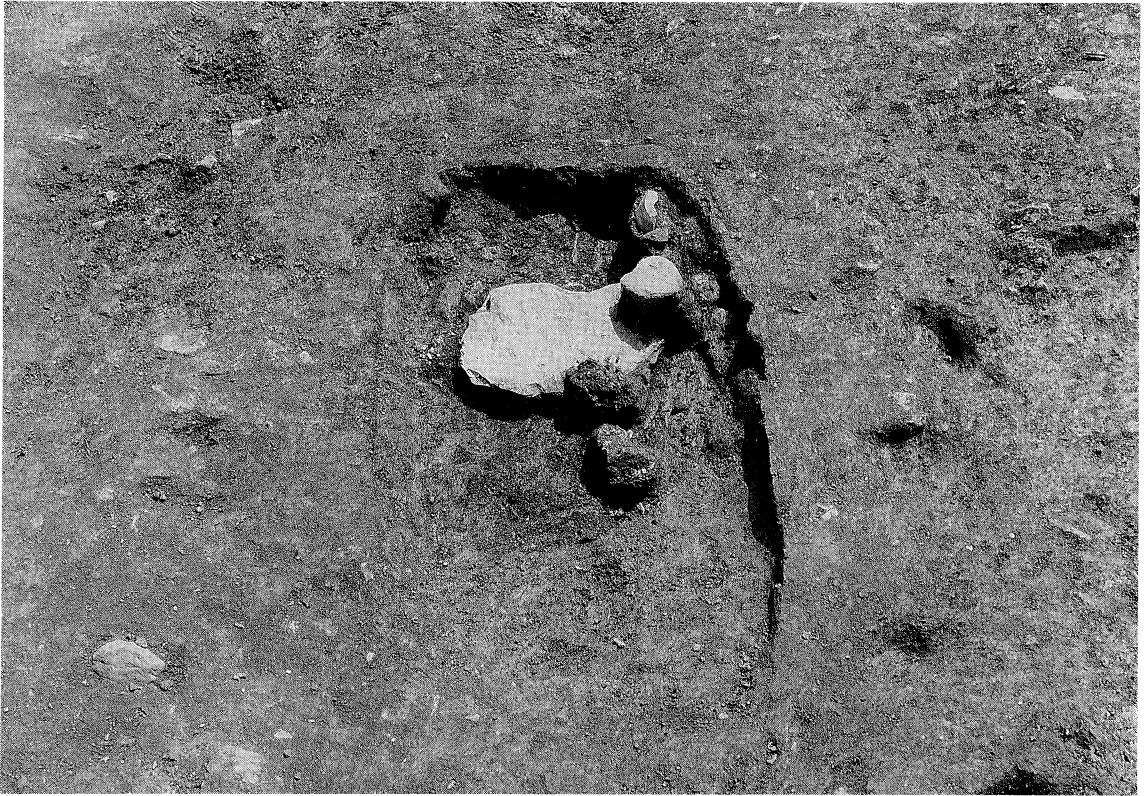
b. 第25号火葬土坑（北から）



a. 第26号火葬土壙（北から）



b. 第26号火葬土壙（東から）



a. 第27号火葬土壙（北から）



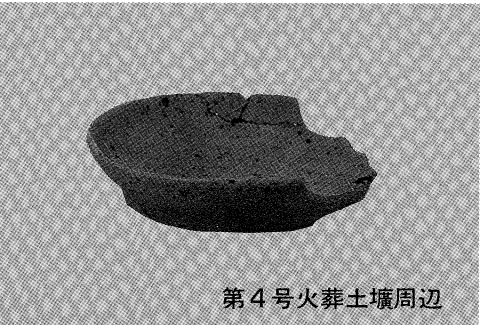
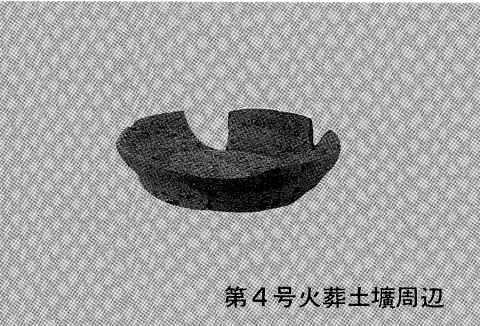
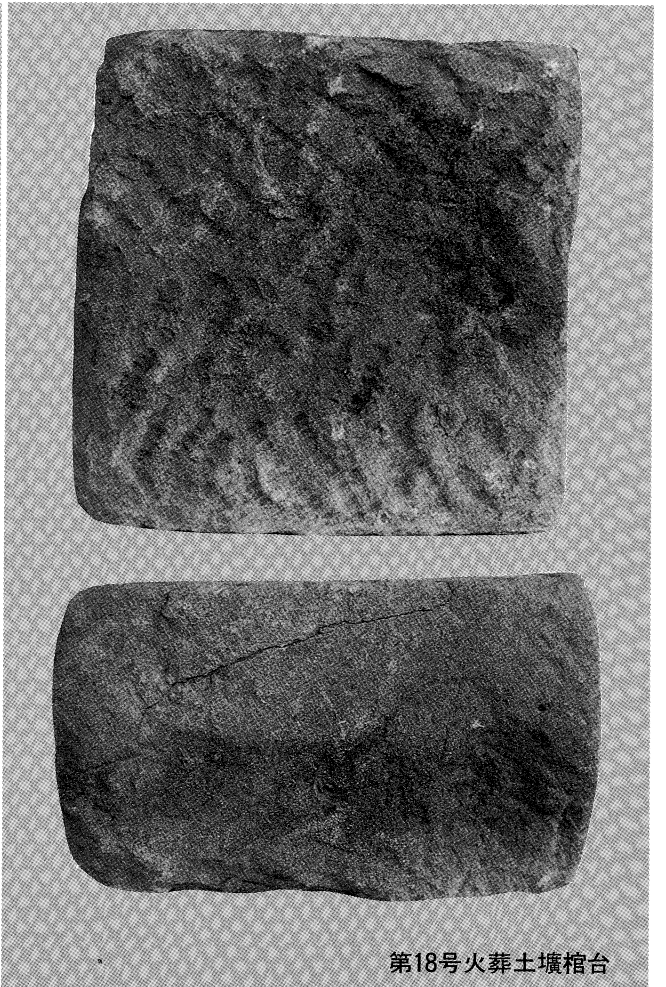
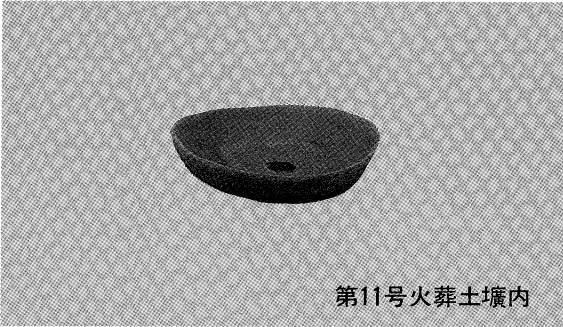
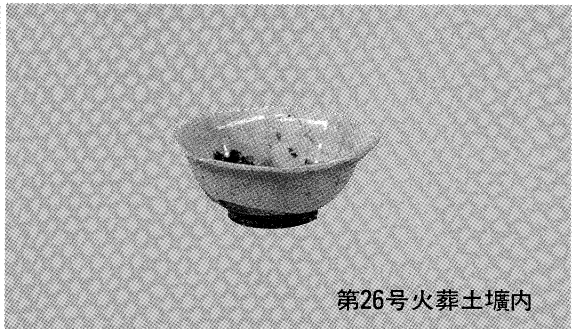
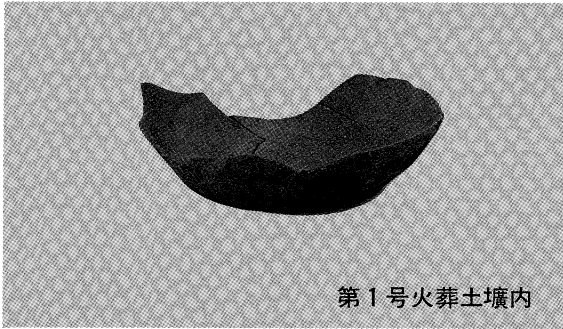
b. 第28号火葬土壙（南から）



a. 第29号火葬土壌（西から）



b. 第1号土壌墓（西から）



前原地区遺跡群

Ⅲ

前原市文化財調査報告書 第45集

発 行 前原市教育委員会
福岡県前原市大字前原623番地

印 刷 株式会社 津村愛文堂
福岡市早良区室見2丁目16番8号

